千葉県文化財センター調査報告第359集

主要地方道千葉竜ケ崎線
埋蔵文化財調査報告書

——八千代市雷遺跡・雷南遺跡——

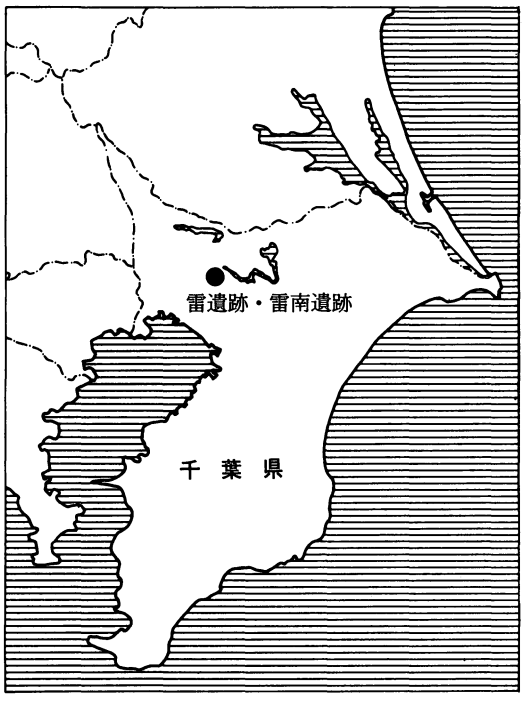
平成11年3月

千　葉　県　土　木　部

財団法人　千葉県文化財センター

主要地方道千葉竜ケ崎線
埋蔵文化財調査報告書

——八千代市雷遺跡・雷南遺跡——



序　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第359集として、千葉県土木部千葉土木事務所の主要地方道千葉竜ケ崎線住宅宅地関連公共施設整備促進事業に伴って実施した八千代市雷遺跡・雷南遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器集中地点や奈良・平安時代の竪穴住居跡が検出されるなど、この地域の原始・古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護と理解のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成11年３月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長　中　村　好　成

凡　例

1　本書は、千葉県土木部千葉土木事務所による主要地方道千葉竜ケ崎線住宅宅地関連公共施設整備促進事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書は、下記の遺跡を収録したものである。

　雷 遺 跡　千葉県八千代市米本字下宿東2431-2ほか（遺跡コード221-025）

　雷南遺跡　千葉県八千代市米本字下宿東2538-4ほか（遺跡コード221-026）

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部千葉土木事務所の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者と実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆は、研究員　榊原弘二が行った。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部千葉土木事務所、八千代市教育委員会の御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

　第２図　上段　参謀本部陸軍部測量局作成　1/20,000迅速測図（明治20年製版）「臼井村」、「白井橋本村」（80％縮小して1/25,000で掲載）

　　下段　国土地理院発行　1/25,000地形図（平成４年修正測量）「白井」（N-54-19-14-3）「小林」（N-54-19-14-1）、「習志野」（N-54-19-14-4）、「佐倉」（N-54-19-14-2）

　第３図　八千代市役所発行　1/2,500　「八千代都市計画基本図№11」

8　遺跡周辺航空写真は、京葉測量株式会社による平成10年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

10　本書で呼称した遺構番号は、編集の都合上、調査時の番号と異なる。

11　本書で使用したスクリーントーン及び記号の用例は、挿図中に記した。

本文目次

Ⅰ　はじめに……1
　1　調査の概要……1
　　(1)　調査の経緯と経過……1
　　(2)　調査の方法……1
　2　遺跡の位置と歴史的環境……2
　3　層序区分……5
Ⅱ　雷遺跡……7
　1　概要……7
　2　遺構と遺物……9
Ⅲ　雷南遺跡……10
　1　概要……10
　2　遺構と遺物……12
　　(1)　旧石器時代……12
　　(2)　縄文時代以降……16
Ⅳ　まとめ……23
報告書抄録……巻末

挿図目次

第1図　グリッド呼称図……1
第2図　遺跡の位置と周辺の遺跡……3
第3図　遺跡周辺地形図……4
第4図　土層柱状図……6
第5図　下層（旧石器時代）調査範囲図……7
第6図　上層（縄文時代以降）調査範囲及び遺構配置図……8
第7図　001号跡実測図……9
第8図　出土遺物……9
第9図　下層（旧石器時代）調査範囲図……10
第10図　上層（縄文時代以降）調査範囲及び遺構配置図……11
第11図　石器出土分布図（器種別）……13
第12図　石器出土分布図（石材別）……14
第13図　出土石器……15
第14図　001号跡実測図……16
第15図　002号跡実測図・出土遺物……17
第16図　003号跡実測図・出土遺物……18
第17図　004号跡・005号跡実測図……20
第18図　006号跡実測図……20
第19図　007号跡実測図・出土遺物……21
第20図　008号跡実測図・出土遺物……21
第21図　グリッド等出土遺物……22

表目次

第1表　石器組成表……12
第2表　石器観察表……15

図版目次

図版1　遺跡周辺航空写真
図版2　雷遺跡調査前近景・001号跡・出土遺物
図版3　雷南遺跡調査前近景・旧石器時代石器出土状況・調査状況
図版4　001号跡・002号跡・003号跡
図版5　004号跡・005号跡・006号跡　007号跡・旧石器時代石器
図版6　出土遺物

Ⅰ　は　じ　め　に

1　調査の概要

(1)　調査の経緯と経過

千葉県土木部は、当地域の道路網の整備を目的として主要地方道千葉竜ケ崎線住宅宅地関連公共整備促進事業を計画した。事業地区内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて関係諸機関と協議した結果、記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

発掘調査及び整理作業は、調査部長　西山太郎（平成９年度）、沼澤　豊（平成10年度）、北部調査事務所長　折原　繁の指導のもと、下記のとおり実施した。

平成９年度

発掘調査

雷　遺　跡：調 査 期 間　　平成９年４月３日～４月18日、平成９年10月１日～10月17日

調査対象面積　　5,563㎡

確認調査面積　　上層　556㎡、下層　112㎡

本 調 査 面 積　　上層・下層　０㎡

雷 南 遺 跡：調 査 期 間　　平成９年４月11日～７月28日

調査対象面積　　6,326㎡

確認調査面積　　上層　633㎡、下層　256㎡

本 調 査 面 積　　上層　1,035㎡、下層　136㎡

発掘担当者：研究員　猪股　昭喜、研究員　綿貫　貴

整理作業

整 理 期 間：平成９年８月１日～８月31日、10月20日～11月30日、平成10年３月１日～３月31日

整理担当者：研究員　猪股　昭喜（11月30日まで）　研究員　綿貫　貴（３月）

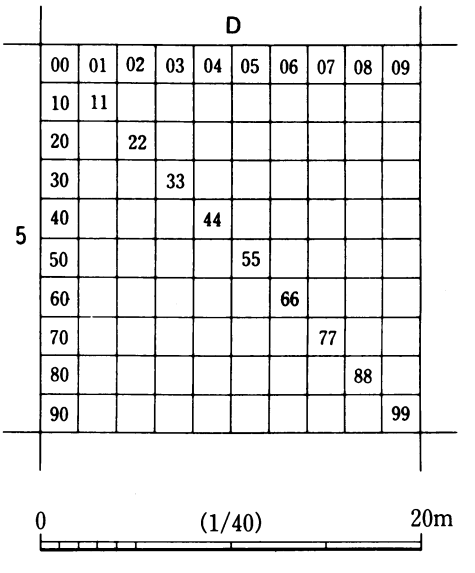
平成10年度

整 理 期 間：平成10年８月１日～８月31日

整理担当者：研究員　榊原　弘二

(2)　調査の方法

雷遺跡・雷南遺跡の発掘区の設定は、国土地理院国家座標を基準とし、20m×20mの方眼を大グリッドとし、西から東に向かってそれぞれA・B・C･･･、北から南に向かって１・２・３とし、１A、２Bと呼称した。さらに大グリッド内を第１図のように２m方眼の小グリッドに分割し西から東へ00・01・02･･･、北から南へ00・10・20･･･とした。したがって、各々の小グリッドは１A-10、２B-13等となる。



第１図　グリッド呼称図

上層（縄文時代以降）の確認調査は調査区に沿って、幅２mのトレンチを10%の割合で設定した。上層の本調査は、遺構を検

出したトレンチの周囲を重機により拡張し実施した。下層（旧石器時代）の確認調査は２m×２mグリッドを２％設定し調査した。雷南遺跡では、下層中から遺物が出土したため、さらに２％の確認調査を追加した。下層の本調査は遺物の出土したグリッドの周囲を拡張し実施した。

遺物の取上げについては、遺構内の遺物は遺構ごとの通し番号で、旧石器時代の遺物については小グリッド内の通し番号で行った。なお、遺構外の遺物については、雷遺跡は遺物量が若干であったため遺跡内一括で、雷南遺跡は大グリッド一括で処理した。

遺構番号は、調査順に001号跡・002号跡・・・と通し番号を付したが、本書では編集の都合上調査時と異なる番号を付した。なお、発掘調査時の遺構番号を（　）内に記載した。各種記録類や出土遺物に記載された遺構番号及び遺物番号は発掘調査時のものである。

2　遺跡の位置と歴史的環境

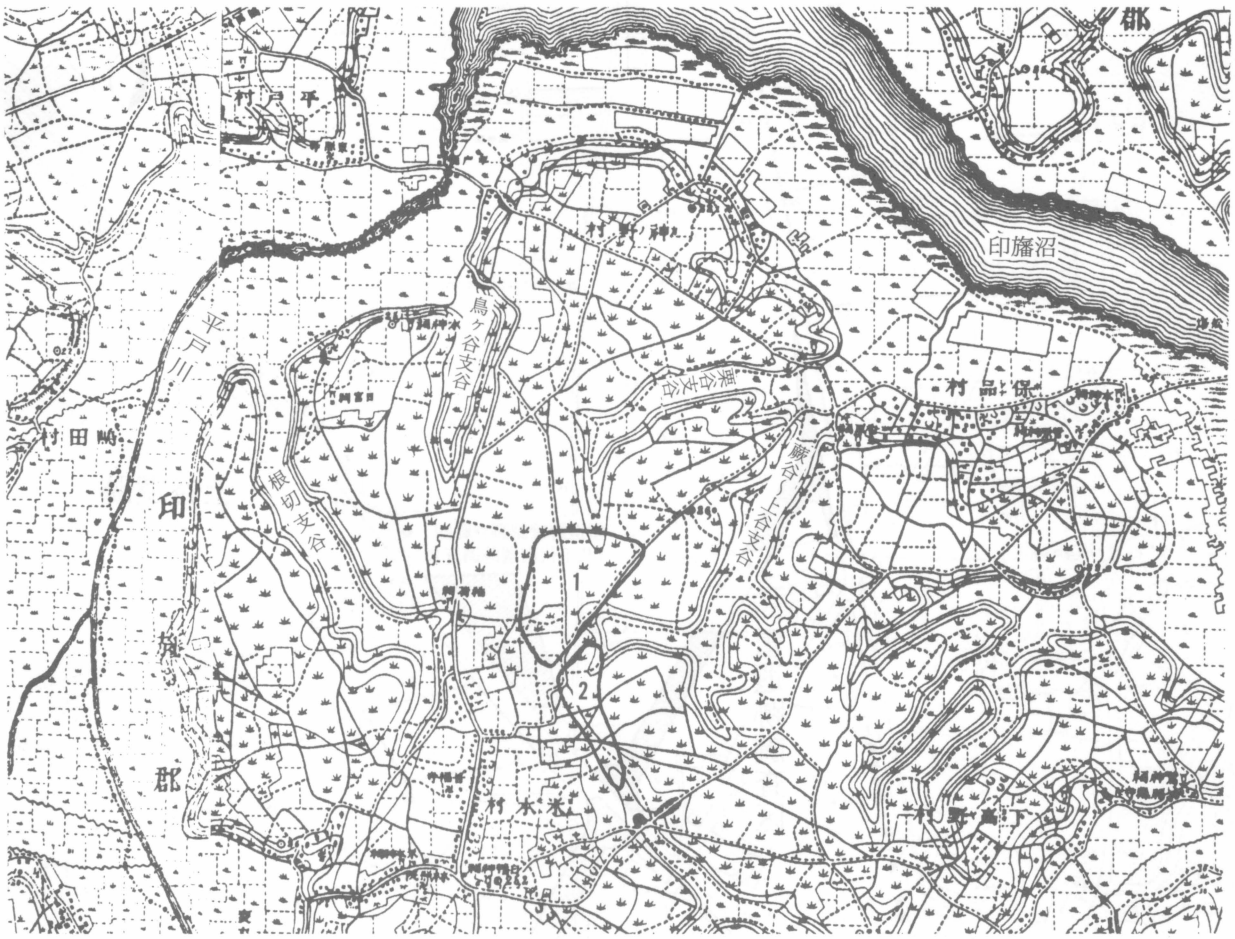
雷遺跡(1)・雷南遺跡(2)は、印旛沼と印旛沼に流入する新川（旧平戸川）によって開析された標高22m～25mの台地上に位置する。

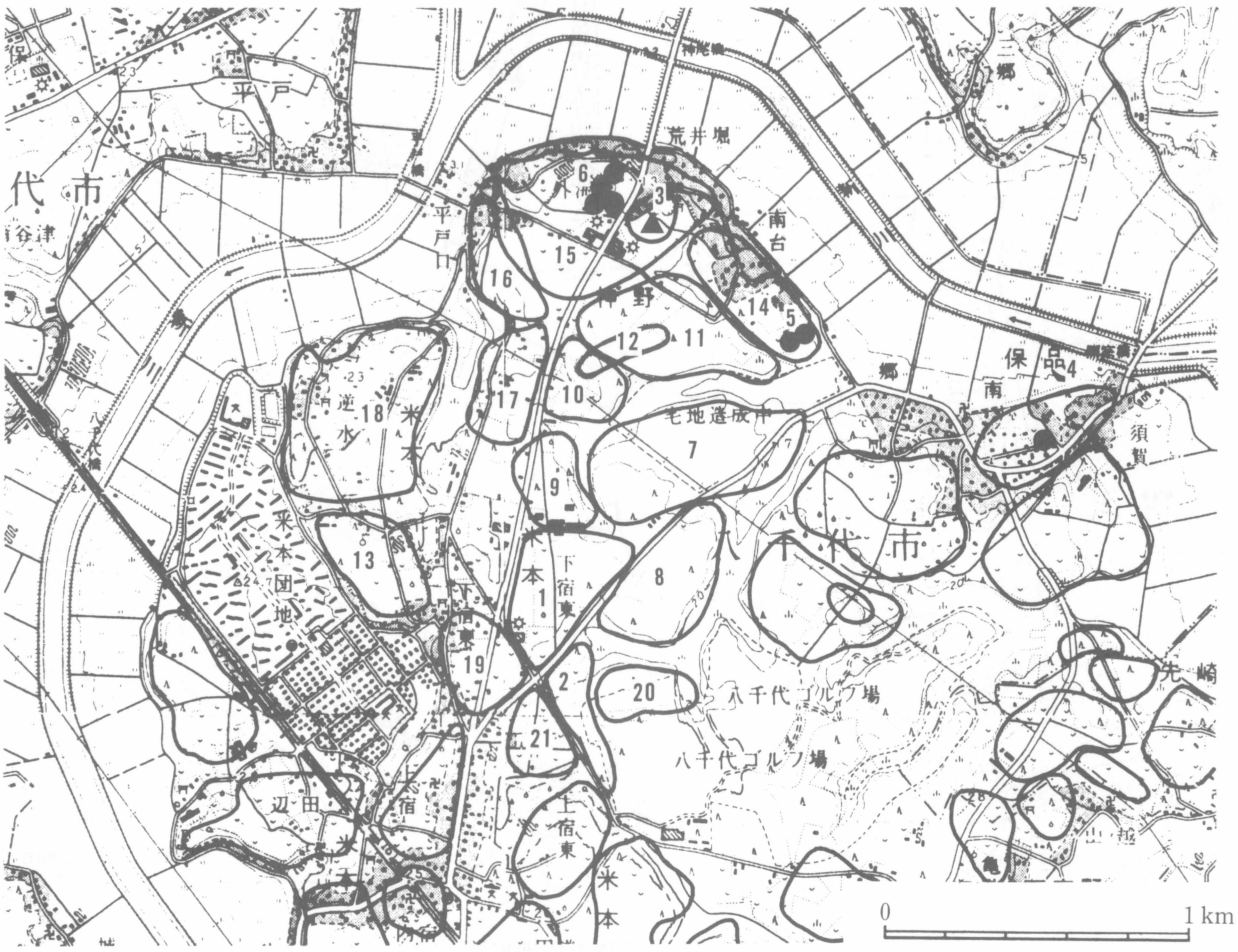
この台地は、新川が大きく湾曲しているため、一見すると大きな半島状の台地に見える。しかし、新川～印旛沼の低地から台地を刻む多数の支谷により、樹枝状に台地が開析されているため複雑な地形を呈している。

雷遺跡・雷南遺跡周辺の地形を見ると、西方には米本団地の造成により旧地形が失われているが、新川から南へ入る根切支谷（仮称）、東方には郷から入る蕨谷～上谷支谷と比較的大きな支谷が入り込んできている。さらに両支谷に挟まれた台地には、平戸口から入る鳥ケ谷支谷、郷から入る栗谷支谷が雷遺跡・雷南遺跡近くまで入り込んできている。雷遺跡の北端は、鳥ケ谷支谷の最奥部の埋没谷の縁辺部に位置しているため台地平坦面より一段低い面になっている。また、雷南遺跡の南東には、井野川の支流が形成する支谷がすぐ近くまで入り込んできている。このように雷遺跡・雷南遺跡はこれらの支谷の最奥部の台地上に位置する。しかも雷遺跡・雷南遺跡は県道をはさんで遺跡名を異にしているだけで、地形的に見れば連続した台地上にあるといえる[1]。

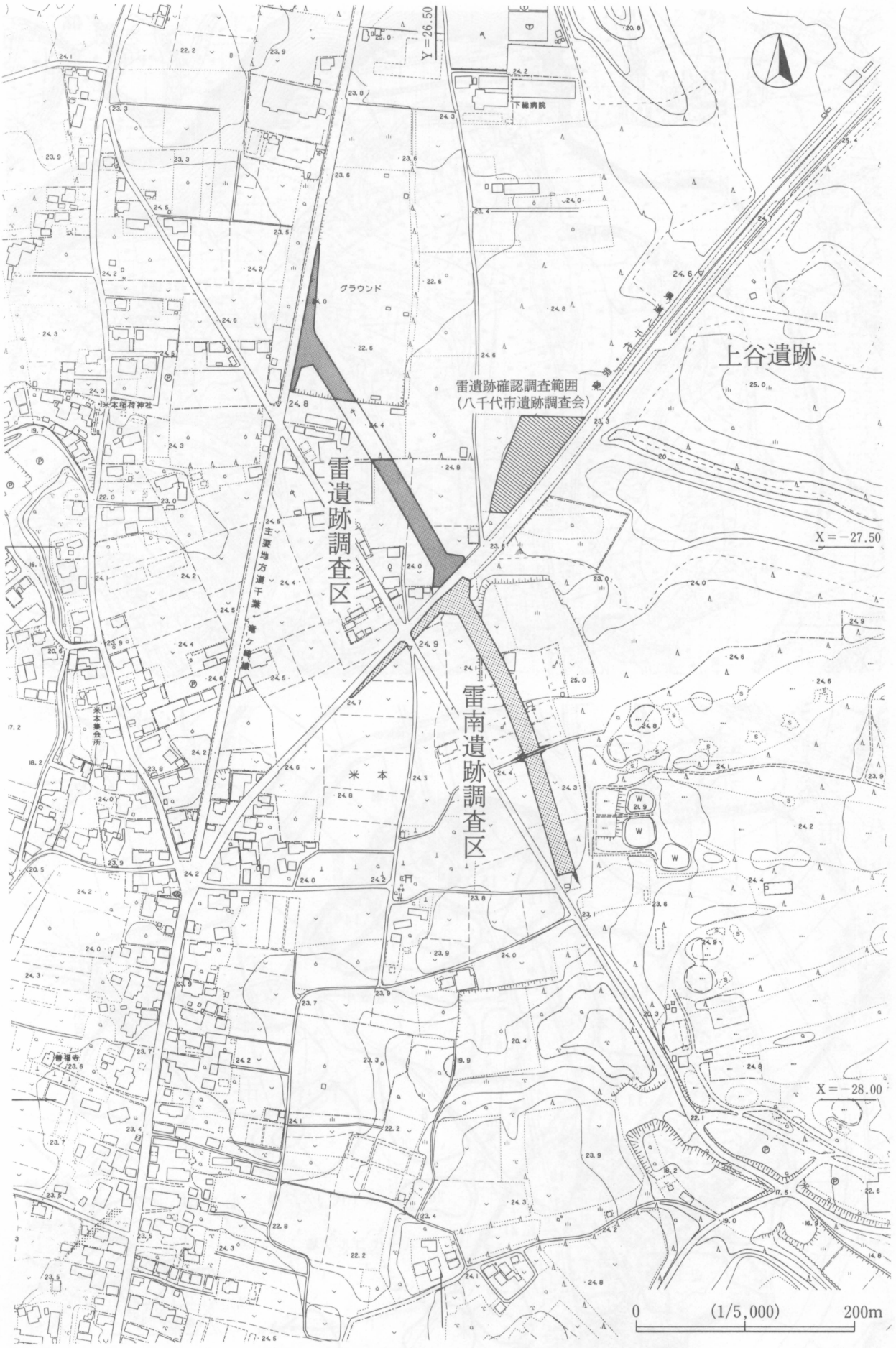
根切支谷と蕨谷～上谷支谷に挟まれた台地上は、印旛沼への水利にも恵まれていたため、遺跡の分布は第２図にあるように集落跡、貝塚、古墳、塚等が密集している。神野（かの）貝塚(3)は、縄文時代中・後期の土器が散布し、汽水性のヤマトシジミを主体にし、鹹水性の貝が少量混じる地点貝塚が形成されている[2]。また、神野貝塚の東1.5kmの低地（現水田面）には縄文時代の刳舟が出土した大江間（おおえま）遺跡(4)がある[3]。保品（ほしな）栗谷（くりや）古墳(5)は、古く昭和26年（1951年）に早稲田大学により調査され、箱式石棺を伴う円墳から直刀、刀子、鉄鏃、勾玉などが出土している[4]。神野芝山（かのしばやま）古墳群(6)は、昭和47年に調査され、２号墳（円墳）の箱式石棺内から人骨10体内外、鉄鏃、刀子、玉類が出土している。４号墳からは石枕が出土し注目されている[5]。

1．雷遺跡	2．雷南遺跡	3．神野貝塚	4．大江間遺跡	5．保品栗谷古墳
6．神野芝山古墳群	7．栗谷遺跡	8．上谷遺跡	9．役山東遺跡	10．向境遺跡
11．境堀遺跡	12．神野群集塚	13．大山遺跡	14．南台遺跡	15．神野遺跡
16．平戸口遺跡	17．役山遺跡	18．逆水遺跡	19．下宿東遺跡	20．向割遺跡
21．上宿東遺跡				





第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡（上段 迅速測図　下段 1/25,000地形図）


Y=26.50
下総病院
グラウンド
上谷遺跡
雷遺跡確認調査範囲
(八千代市遺跡調査会)
米本稲荷神社
雷遺跡調査区
雷南遺跡調査区
主要地方道千葉・竜ケ崎線
米本集会所
米本
X=−27.50
X=−28.00
0
(1/5,000)
200m

第3図　遺跡周辺地形図

また、昭和63年３月から八千代市遺跡調査会により、大学造成及び住宅地造成工事に伴う発掘調査が実施されている。事業地内には、栗谷遺跡(7)・上谷遺跡(8)・役山東遺跡(9)・向境遺跡(10)・境堀遺跡(11)・神野群集塚(12)・雷遺跡の７遺跡があり、縄文時代早期から弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世に至るまで多数の遺構・遺物が検出されている[6]。栗谷遺跡では、縄文時代早期の炉穴群と土器包含層、弥生時代後期の竪穴住居跡群と方形周溝墓群、平安時代の竪穴住居跡群と掘立柱建物跡群が検出されている。上谷遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡・炉穴・土坑、弥生時代後期の竪穴住居跡群、奈良・平安時代の竪穴住居跡100軒以上と掘立建物跡100棟以上検出されている。遺物では、平安時代の人面刻書土器（土師器坏）や紀年銘入り人面墨書土器（土師器坏）が出土して注目されている[7]。役山東遺跡・向境遺跡では、縄文時代早期の炉穴群と土器包含層、弥生時代後期の竪穴住居跡群、平安時代の竪穴住居跡群が検出されている。境堀遺跡では、縄文時代の炉穴群、弥生時代後期の竪穴住居跡群、古墳時代前期の竪穴住居跡群、平安時代の竪穴住居跡群と掘立建物跡群が検出されている。神野群集塚では、中・近世の塚38基が確認されている。雷遺跡は、今回報告する調査区より北東へ50m～100mの地点（第３図）で確認調査が行われており、竪穴住居跡（弥生時代～奈良・平安時代）が24軒検出されている。現在、これらの遺跡の発掘調査が継続的に行われており、調査報告書の刊行がまたれるところである。

以上のように根切支谷と蕨谷～上谷支谷に挟まれた台地上には、縄文時代の早期から中・近世までの遺跡が大規模に展開している。しかし、旧石器時代についてはこの地域は空白で、大山遺跡(13)で剝片が確認されているのが報告されている程度である[8]。今後の旧石器時代の調査例の増加とともに出土資料の整備が進んでいくものと思われる。

3　層序区分

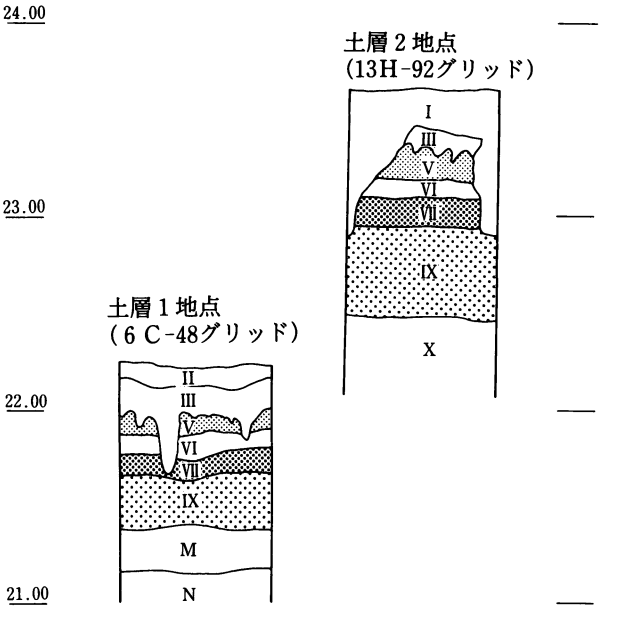
雷遺跡と雷南遺跡は、前項でも触れたように同一台地上でしかも隣接した遺跡であり、基本的な層序区分は同様な特徴を有している。発掘調査での観察を中心に行った層序区分を、台地平坦面では雷遺跡13H-92グリッド、平坦面よりやや下がった低い面(鳥ケ谷支谷最奥の埋没谷縁辺部)では雷遺跡６Ｃ-48グリッドの土層柱状図で記す。

基本層序

Ⅰ　層：耕作土である。部分的に深耕が行われている。

Ⅱ　層：褐色土で、いわゆる「新期テフラ層」を含む層である。下位はⅢ層のソフトロームに漸移する。耕作土（Ⅰ層）や削平のためⅡ層の遺存状態はよくない。13H-92グリッドでは、耕作がⅢ層まで及んでいるためⅡ層は遺存しない。

Ⅲ　層：黄褐色軟質ローム土でいわゆるソフトローム層と呼ばれる層である。Ⅳ



第４図　土層柱状図（1/40）

～V層まで入り込んでソフト化しているためⅣ層は不明瞭である。

V　層：黄褐色硬質ローム土で、第1黒色帯に相当する層である。

Ⅵ　層：明黄褐色硬質ローム土で、姶良Tn火山灰を包含する。

Ⅶ　層：褐色硬質ローム土で、第2黒色帯上部に相当する層である。

Ⅸ　層：暗褐色硬質ローム土で、第2黒色帯下部に相当する層である。分層していないが、下位はやや暗色化している。6C-48グリッドのような低位の面ではⅨ層の下位からM層に取り込まれている。

X　層：褐色ローム土で立川ローム最下層である。台地平坦面で確認された。

M　層：暗褐色ローム土で水の影響によって変成を受けて粘土化している層である。いわゆる「水つきローム」と呼ばれている層で、Ⅸ層の下位からX層と武蔵野ローム上部層と思われる。M層は低位の面でのみ確認された。

N　層：灰白色粘土である。上位はやや浅黄色を呈する。M層が確認された下層から検出された。

注1　下記文献では雷遺跡・雷南遺跡を統合して雷遺跡としている。また、雷南遺跡の調査区の北西部（5Dグリッド以西）は、下記文献では上宿東遺跡の範囲内に入る。ここでは、同一の連続した台地上で、市道はさんで遺跡名を異にしているだけなので、雷南遺跡に含めることにした。

千葉県教育委員会　1997　『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛飾・印旛地区（改訂版）－』

2　千葉県教育委員会　1983　『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』

3　八千代市　1991　『八千代の歴史　資料編　原始・古代・中世』

4　注3の文献と同じ

5　注3の文献と同じ

6　八千代市教育委員会　1995　『平成6年度　八千代市埋蔵文化財調査年報』

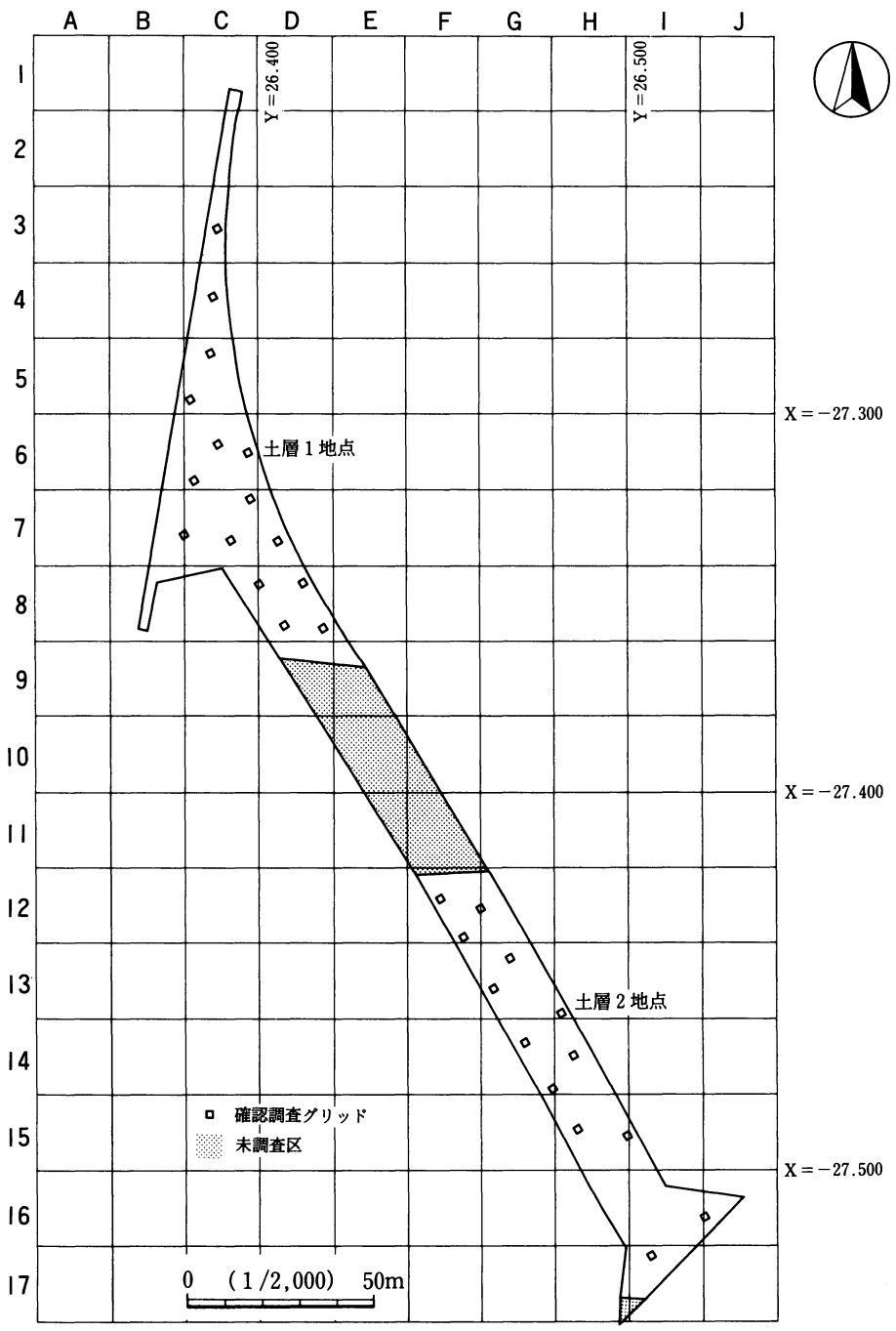
7　八千代市教育委員会　1998　『上谷遺跡から見つかった二つの人面土器（展示パンフレット）』

8　八千代市史編さん委員会　1978　『八千代市の遺跡』

II 雷 遺 跡

1 概要

今回の調査区は、標高24mの台地の平坦面とそれより約1.5m低い面とに分かれる。９Ｅグリッド以南は平坦面で、雷南遺跡からの連続した台地である。９Ｄ・９Ｅグリッド以北は低位の面で、支谷の最奥部、埋没谷の縁辺部に当たると思われる。現状では整地されてグランドになっているため現地形図では分かり



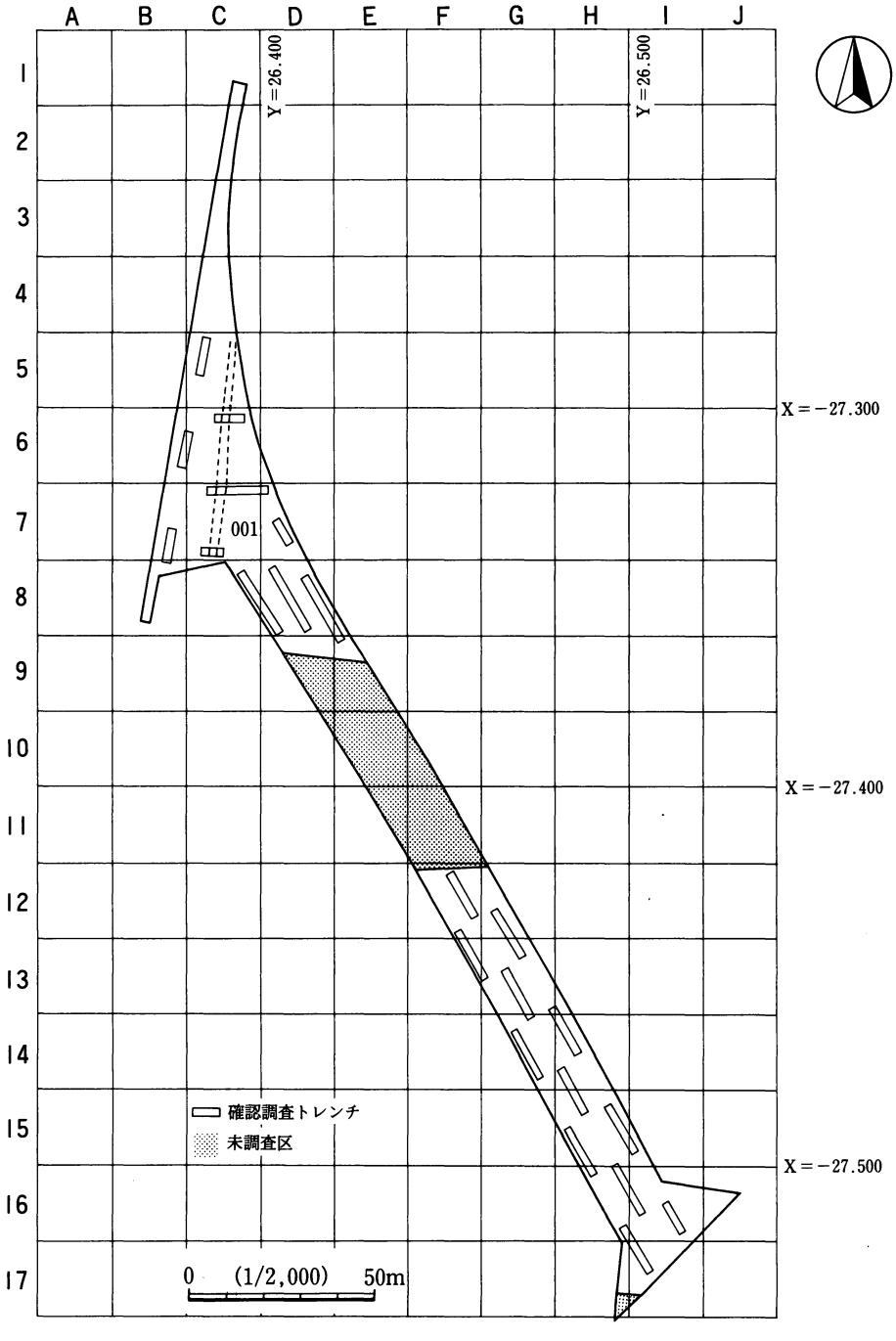
第５図 下層（旧石器時代）調査範囲図

にくいが、第４図の土層柱状図で見れば比高差が明確である。

下層（旧石器時代）の調査（第５図）では、確認調査で遺物が検出されなかったため、確認調査で終了した。

上層（縄文時代以降）の調査（第６図）では、調査区の北部の低位の面から溝１条が検出されたのみである。遺物包含層も存在しなかったため、確認調査で終了した。

遺物は、表土中から弥生土器・土師器・須恵器・近世陶磁器・土製品が若干出土したのみである。



第６図　上層（縄文時代以降）調査範囲及び遺構配置図

2　遺構と遺物

001号跡（第７図、図版２）

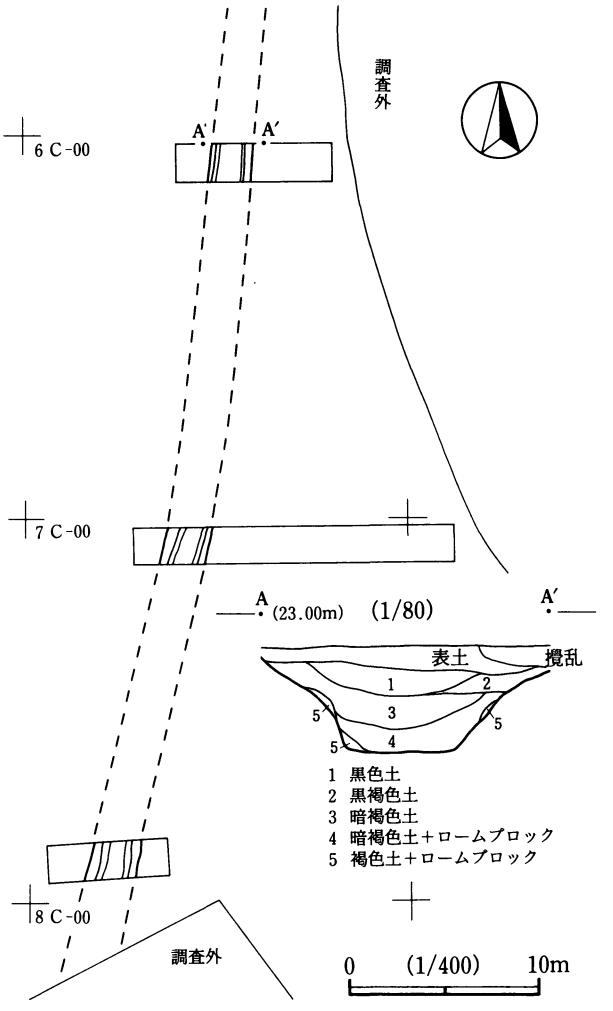
調査区の北部に南北にのびる溝状遺構で、両端は調査区外まで続いていると思われる。溝は確認調査トレンチで一部確認したのみである。溝の幅は約２m、確認面からの深さ約0.7mを測る。底面は幅約１mほどで平坦面になっている。底面から約0.2mほどは急に立ち上がり、それから上は緩やかに開いていく。覆土は黒褐色土ないし暗褐色土で、比較的締まりがあるが硬化面は認められなかった。底面付近にはロームブロックが見られる。

遺物は出土しなかった。

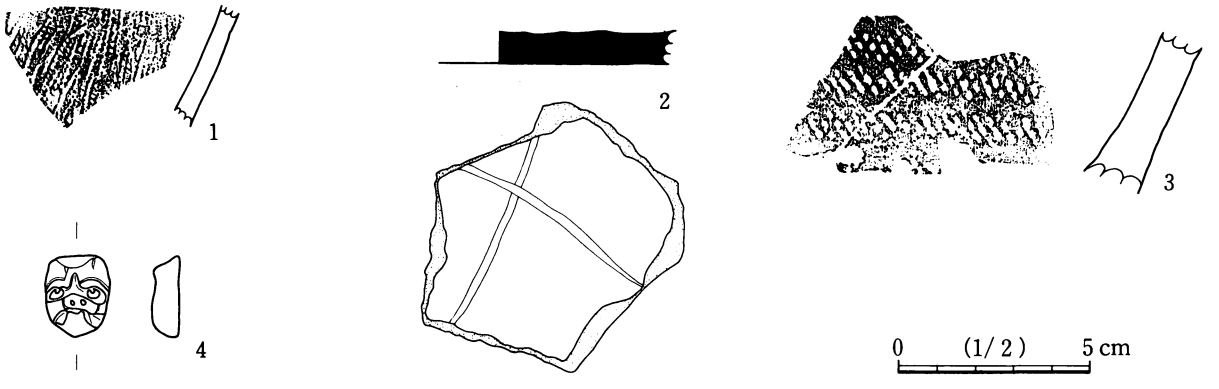
出土遺物（第８図、図版２）

表土中から出土した遺物のうち図示し得たものは４点である。そのほかにも土師器・須恵器の細片が若干出土している。

１は弥生土器で附加条縄文が施される。２は須恵器の坏の底部である。底部内面はロクロナデ、外面は一定方向のヘラケズリが施される。色調は灰色で、胎土に雲母粒や白色粒（長石･石英類）、砂粒が含まれる。外面に焼成前のヘラ書きが見られる。３は近世の火鉢類の破片と思われる瓦質土器である。外面に回転押印文が施される。４は泥面子で、人面を型抜きしたものである。現存重量2.3gを測る。



第７図　001号跡実測図



第８図　出土遺物

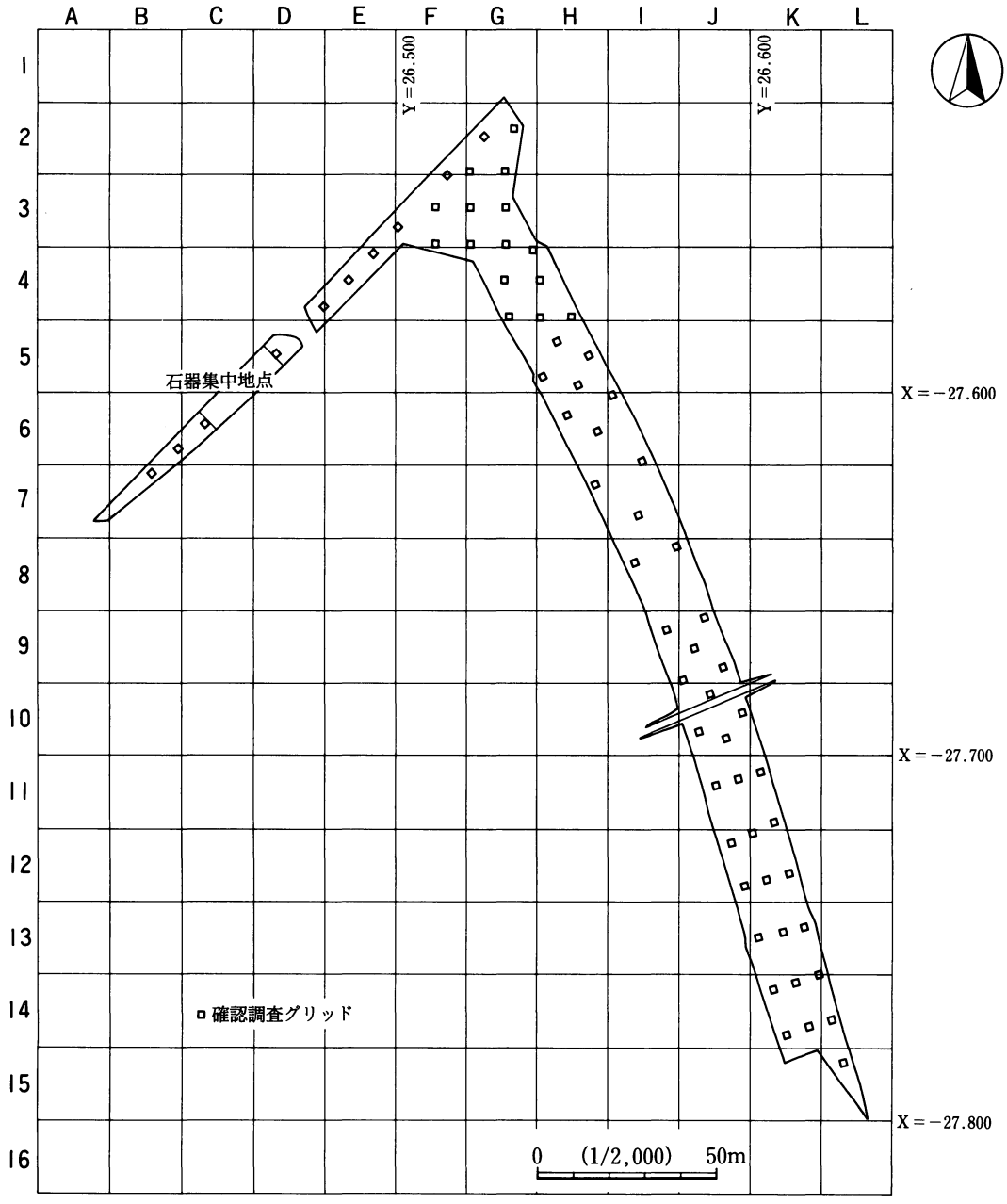
III 雷 南 遺 跡

1 概要

下層（旧石器時代）の調査（第９図）では、調査区西側の５Ｃ・５Ｄグリッド周辺からIII層を中心とする石器集中地点が１か所検出された。さらに石器集中は、調査区外にも広がる様相を呈していた。

上層（縄文時代以降）の調査（第10図）では、遺構が調査区の北半部から集中して検出された。

縄文時代の遺構は、陥穴（001号跡）が１基検出されている。遺物は表土中あるいは後世の遺構から若干出土したもので、陥穴から出土したものはない。また、耕作等による攪乱が顕著なため、包含層も残存し



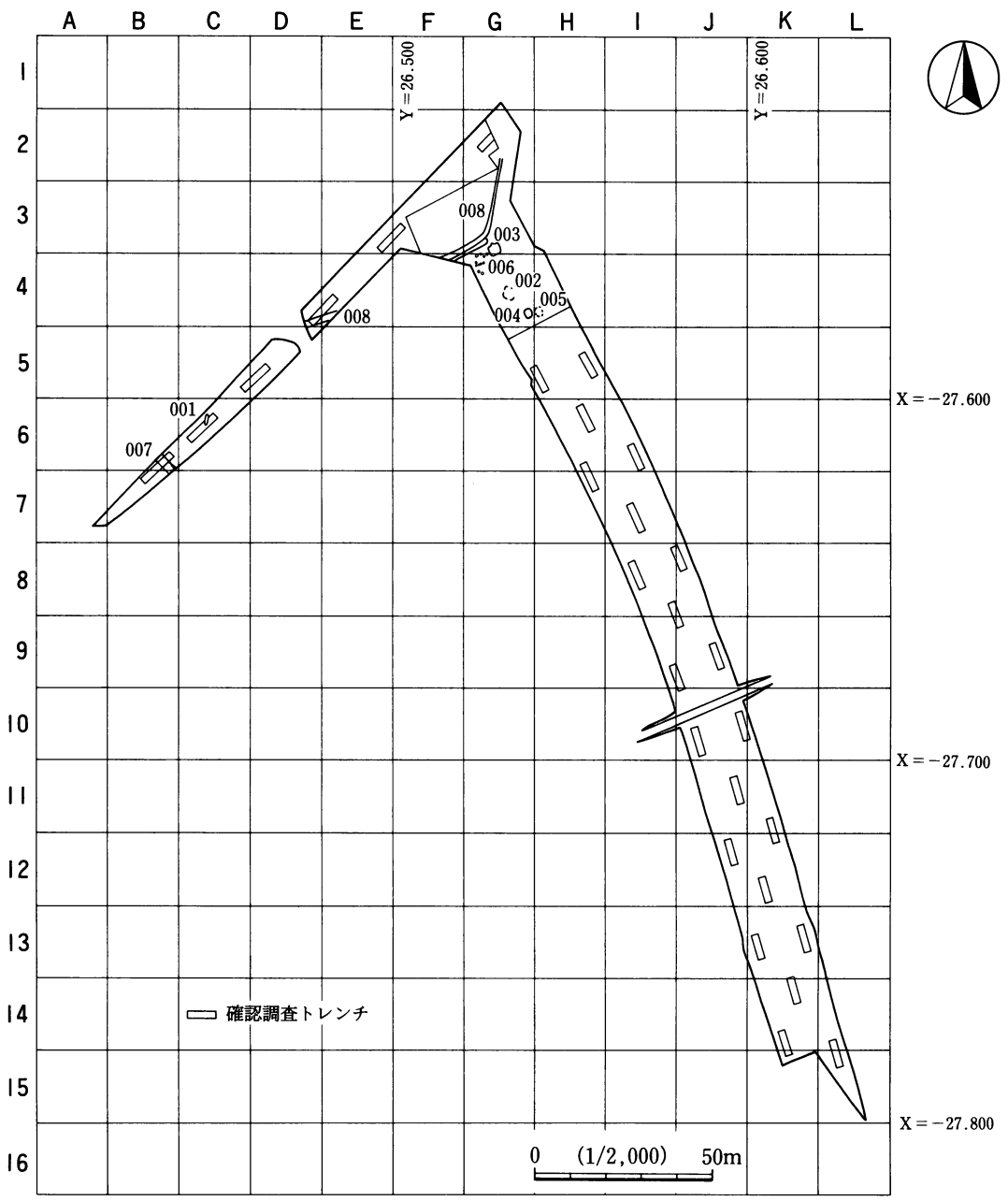
第９図　下層（旧石器時代）調査範囲図

ていない。

弥生時代の遺構は、後期の竪穴住居跡（002号跡）が１軒検出されたが、攪乱が著しいため遺存状態が悪い。遺物も住居跡から土器が数点出土しているのみである。

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡（003号跡）が１軒が検出されている。遺物は、竪穴住居跡から少量出土しているほかは、表土中や後世の遺構から少量出土している。

その他の時期の遺構として土坑２基（004号跡・005号跡）、ピット群１群（006号跡）、溝状遺構２条（007号跡・008号跡）が検出されている。これらの遺構については明確に伴出する遺物がなく、時期を確定するのが困難である。遺構の形態や覆土等からここでは中・近世の所産とした。遺物は、近世の陶磁器・土製品が数点出土している。中世に時期認定される遺物は出土しなかった。



第10図　上層（縄文時代以降）調査範囲及び遺構配置図

2　遺構と遺物

(1)　旧石器時代

石器集中地点（第11・12図、図版３）

石器の分布範囲の規模は明確には把握できないが、調査区域内で長軸17mを測り、推定で楕円形状を呈する比較的大型のブロックといえる。

遺物の出土層位は、上部はⅠ層やⅡ層、下部はハードロームのⅤ層からも出土しており、上部と下部の比高差は0.6mを測る。

この石器集中地点から総数81点の石器が出土した。

ブロックを構成する遺物の内容は、黒曜石製の槍先形尖頭器、彫刻刀形石器、頁岩製の細石刃が見られる。また、彫刻刀形石器と石材は異なるが、頁岩製の削片（グレイバー・スポール）が出土している。これらの石器点数は、総点数81点のうち７点で、他は微細な砕片が占める。しかし、砕片には尖頭器の調整剥片と考えられる黒曜石製のものが32点認められた。石質も出土した槍先形尖頭器と同一石材である。

石器に使用される石材は黒曜石、頁岩、メノウである。点数的には、黒曜石の64点が多く、頁岩15点、メノウ２点である。各石材の特徴は、以下のとおりである。

黒曜石：色調は基本的には黒色を呈するが、半透明もしくは透明部分が多く見受けられ、黒色の縞状の節理が明瞭に観察できる。挟雑物はほとんど含まず、均一な質感である。黒曜石については出土した石器すべてが同一母岩と考えられる。

頁　岩：色調は原石面が黄褐色、内面は淡い黄褐色を呈する。全体的にきめが細かく、原石面、剥離面には光沢が見られるが、原石面に近い部位はややざらつき光沢も薄れる。挟雑物はほとんど含まれない。

メノウ：色調は淡い乳白色を呈する。きめは細かく均一であるが、光沢はさほど見られない。

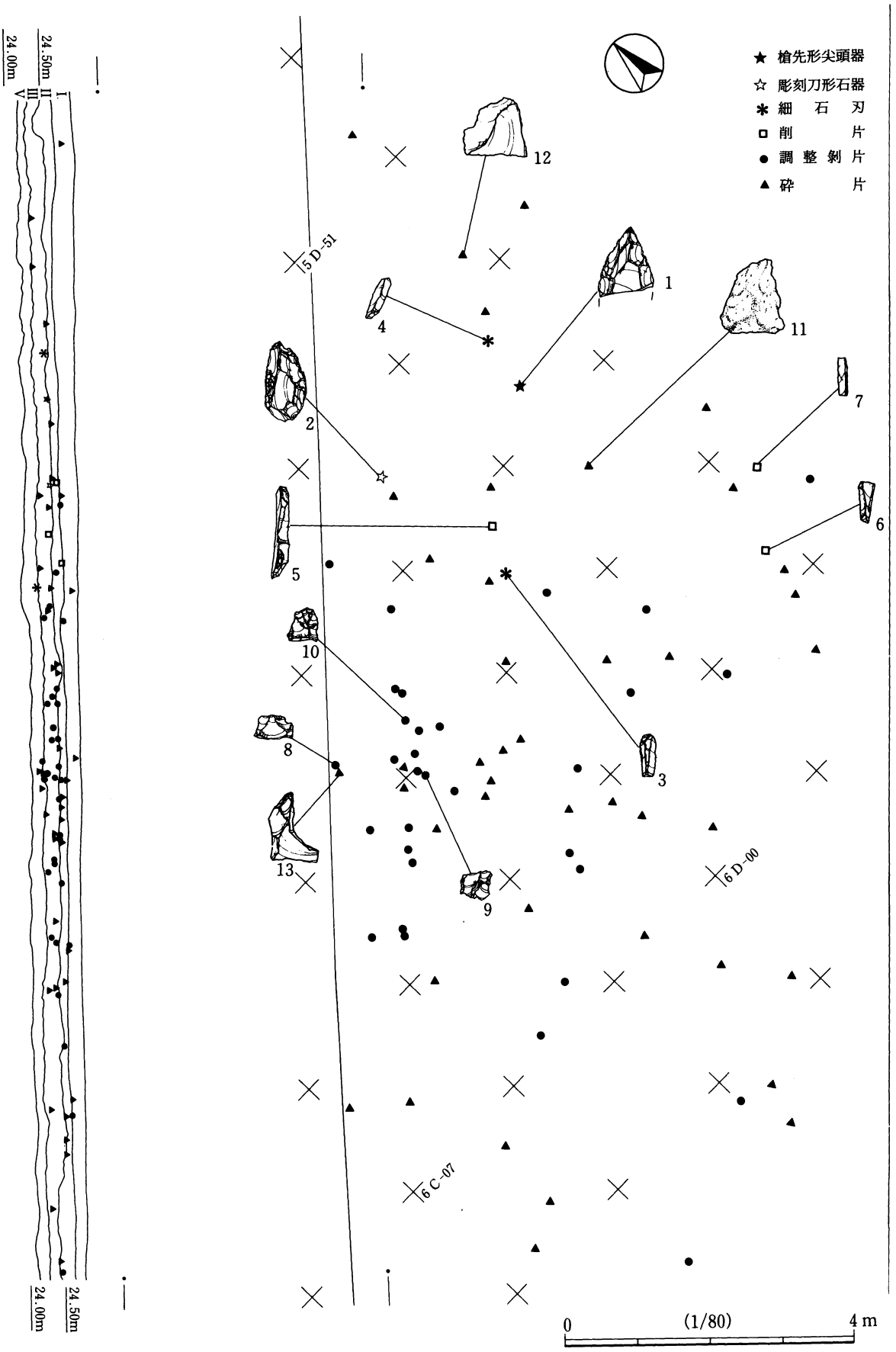
第１表　石器組成表

器種／石材	ナイフ形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台形石器	角錐状石器	掻器	削器	ピエス・エスキーユ	彫刻刀形石器	削片	R・フレイク	U・フレイク	剥片	砕片	剥片利用石核	石核	石斧	礫石	調整剥片	計
黒曜石	―	1 1.2%	―	―	―	―	―	―	―	1 1.2%	―	―	―	―	30 37.0%	―	―	―	―	32 39.5%	64 79.1%
頁岩	―	―	―	2 2.4%	―	―	―	―	―	―	3 3.7%	―	―	―	10 12.3%	―	―	―	―	―	15 18.5%
メノウ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	2 2.4%	―	―	―	―	―	2 2.4%
計	―	1 1.2%	―	2 2.4%	―	―	―	―	―	1 1.2%	3 3.7%	―	―	―	42 52.0%	―	―	―	―	32 39.5%	81 100.0%

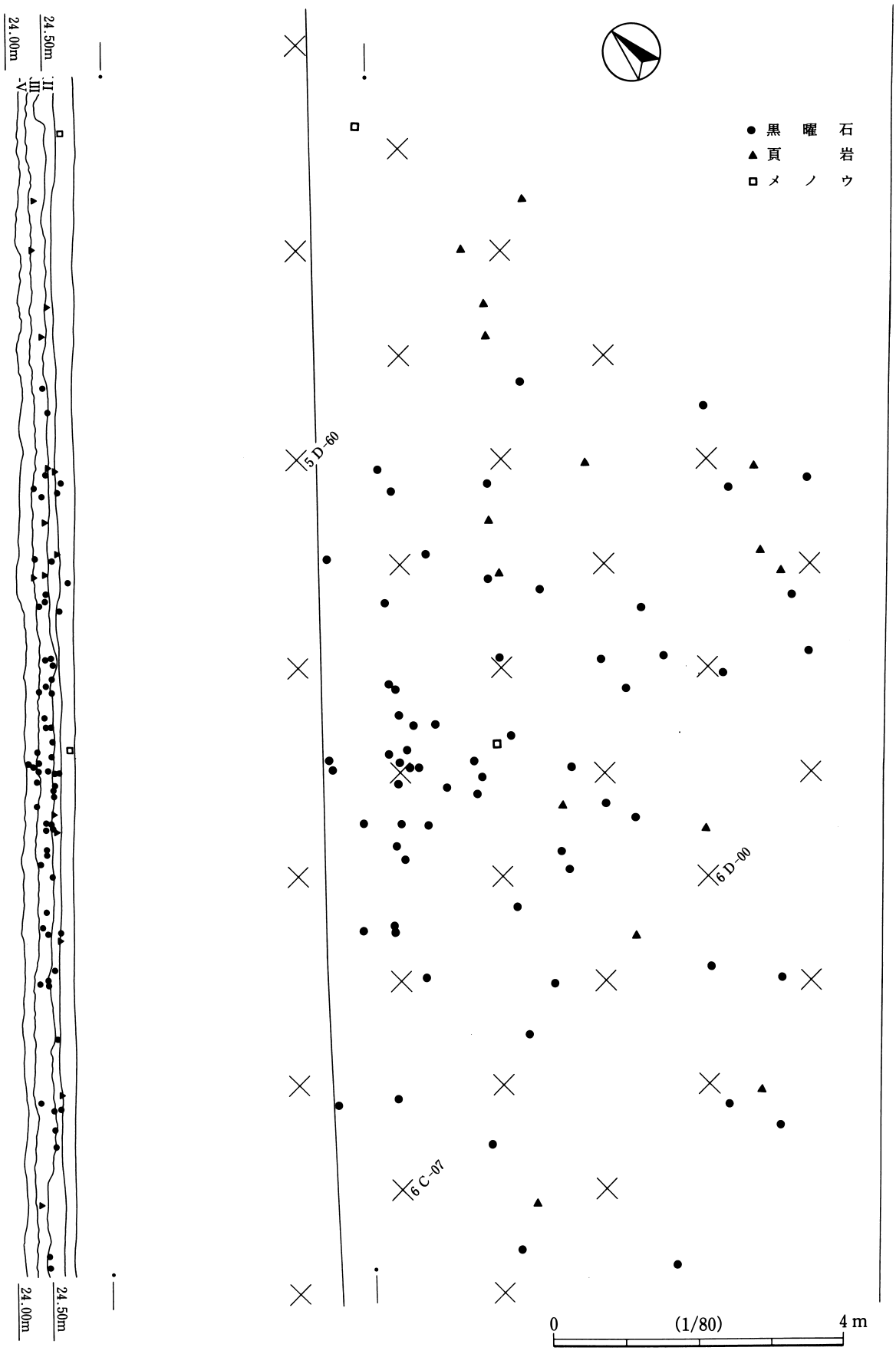
出土遺物（第13図、図版６）

１は黒曜石製の槍先形尖頭器である。基部が欠損する。縦長剥片を素材としている。素材剥片の末端部側が尖頭器の先端部となる。素材剥片の主要剥離面側から表面に向かい全周にわたって調整が施されていると考えられる。表面の剥離の方向は、主要剥離面の剥離の方向と一致しており、連続的に作出されたものとは断定できないが、同一もしくは同方向に位置する打面に対して剥片剥離を行っていることが窺える。主要剥離面側には調整は施されず、このため横断面は台形に近い形状を呈する。先端部は微細な調整が施され鋭利である。

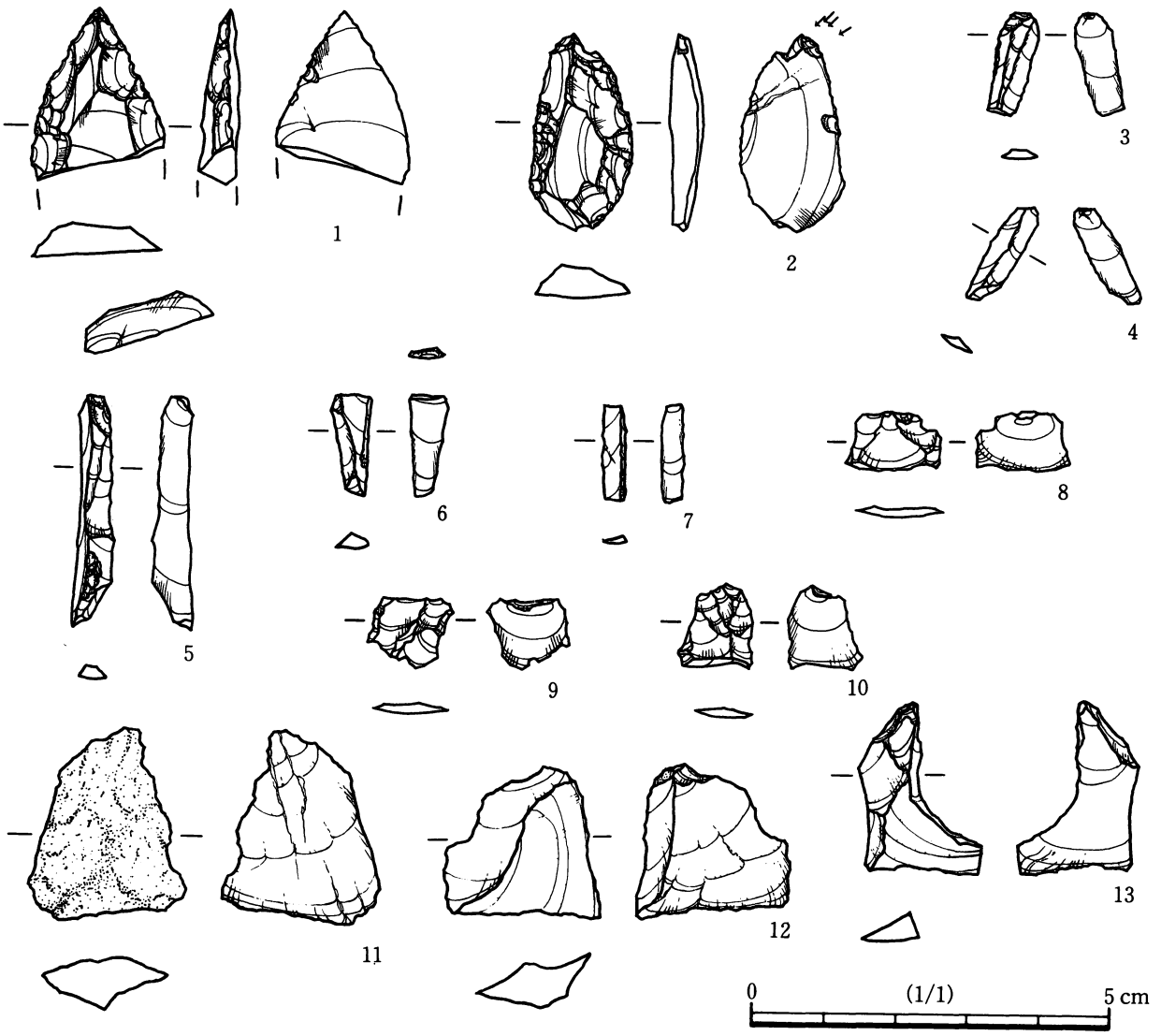
２は黒曜石製の彫刻刀形石器である。横長剥片を素材としている。調整は、１の槍先形尖頭器と同様に



第11図　石器出土分布図（器種別）



第12図　石器出土分布図（石材別）



第13図　出土石器

第２表　石器観察表

挿図番号	遺物番号	器　種	石　質	計測値				備　考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
1	5D-61,01	槍先形尖頭器	黒　曜　石	2.47	1.90	0.53	2.07	基部欠損。片面調整。
2	5D-60,02	彫刻刀形石器	黒　曜　石	2.73	1.48	0.49	1.82	片面調整。
3	5D-70,06	細　石　刃	頁　　岩	1.44	0.72	0.14	0.21	末端部欠損。
4	5D-61,02	細　石　刃	頁　　岩	1.31	1.02	0.12	0.18	
5	5D-70,04	削　　片	頁　　岩	3.19	0.61	0.22	0.65	
6	5D-81,02	削　　片	頁　　岩	1.42	0.59	0.23	0.25	
7	5D-82,01	削　　片	頁　　岩	1.33	0.35	0.13	0.11	
8	5C-78,02	調整剥片	黒　曜　石	0.85	1.35	0.15	0.15	
9	5C-89,10	調整剥片	黒　曜　石	0.96	1.18	0.20	0.19	
10	5C-79,05	調整剥片	黒　曜　石	1.14	1.03	0.12	0.18	
11	5D-71,01	砕　　片	頁　　岩	2.77	2.23	0.74	3.60	原石面残存。
12	5D-51,01	砕　　片	頁　　岩	2.11	2.20	0.63	3.25	
13	5C-78,01	砕　　片	黒　曜　石	2.39	1.72	0.39	0.87	

素材剝片の主要剝離面側から表面に向かい全周にわたって施される。素材剝片の打面は、この調整によって完全に除去されている。ファシットは石器の長軸に対し斜方向から施され、主要剝離面側に4条確認できる。しかし、最も古いファシット以外は周縁部付近でとどまり刃こぼれ状の剝離痕となっている。

3・4は頁岩製の細石刃とした。表面に同一方向から連続的に作出された痕跡が明瞭に確認できる。横断面の形状は台形もしくは三角形を呈する。3の末端部は欠損しており、長軸の計測値は推定で1.5cmほどと考えられる。この2点の石器は、打面に対する長軸の方向が垂直でなく、3は76度、4は58度といずれも横方向に振れている。このことから掻器の調整剝片である可能性も考慮される。

5～7は頁岩製の削片（グレイバー・スポール）である。5は作出された当時の形状をとどめ、長軸の計測値は3.19cmを測る。6・7については中途から欠損しているため長軸の長さは不明である。2の黒曜石製の彫刻刀形石器に見られるファシットと比較するとその長さは著しく異なる。

5の表面左側縁部には元となる彫刻刀形石器の主要剝離面が明瞭に残る。また、このスポールが作出される以前のスポールのネガティブ面が観察される。このため彫刻刀形石器に対し数回の調整が行われていたことが窺える。7の表面左側縁部には元となる彫刻刀形石器の主要剝離面、右側縁部には彫刻刀形石器に対して施された周縁部の調整痕が見られる。2の黒曜石製の彫刻刀形石器と同様に主要剝離面からの調整が施されていたこが理解できる。

8～10は黒曜石製の調整剝片である。黒曜石製の調整剝片と考えられる32点のうち図示可能な大きさはこの3点である。いずれも表面は調整剝離の痕跡が明瞭に観察できる。

11～13は砕片である。11・12は頁岩製、13は黒曜石製である。11の表面は母岩の原石面で占められる。12は原石面は見られないが、色調、剝離面の様子から原石面に近い部位の砕片と考えられる。これらは、剝片剝離過程の初期段階に作出された砕片であることが窺える。

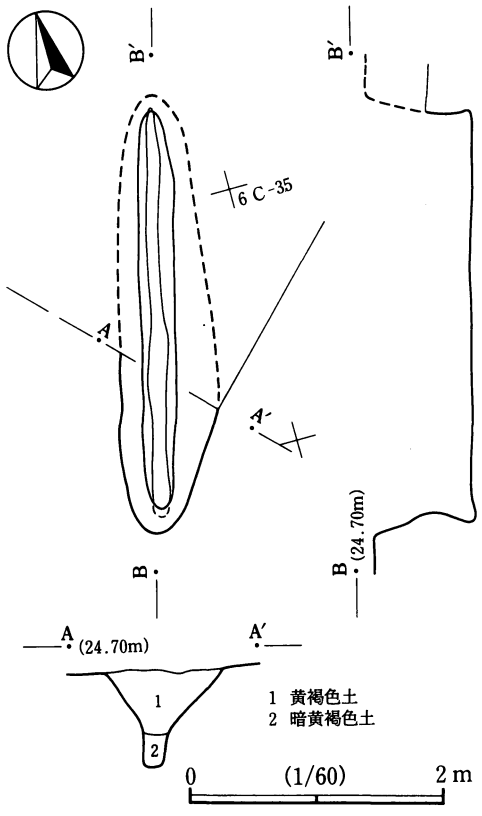
(2) 縄文時代以降

001号跡（012号跡）（第14図、図版4）

6C-34グリッド付近に位置する縄文時代の陥穴である。

下層確認調査中に検出されたもので、北側の確認面がハードローム中である。細長い楕円形で、長軸約3.4m、短軸0.8m、確認面からの深さ0.8mを測る。長軸方向は、N－12°－Eである。底面は幅約0.1mと著しく狭くなっており、両端が若干オーバーハングしている。

遺物は出土しなかった。



第14図　001号跡実測図

002号跡（011号跡）（第15図、図版4・6）

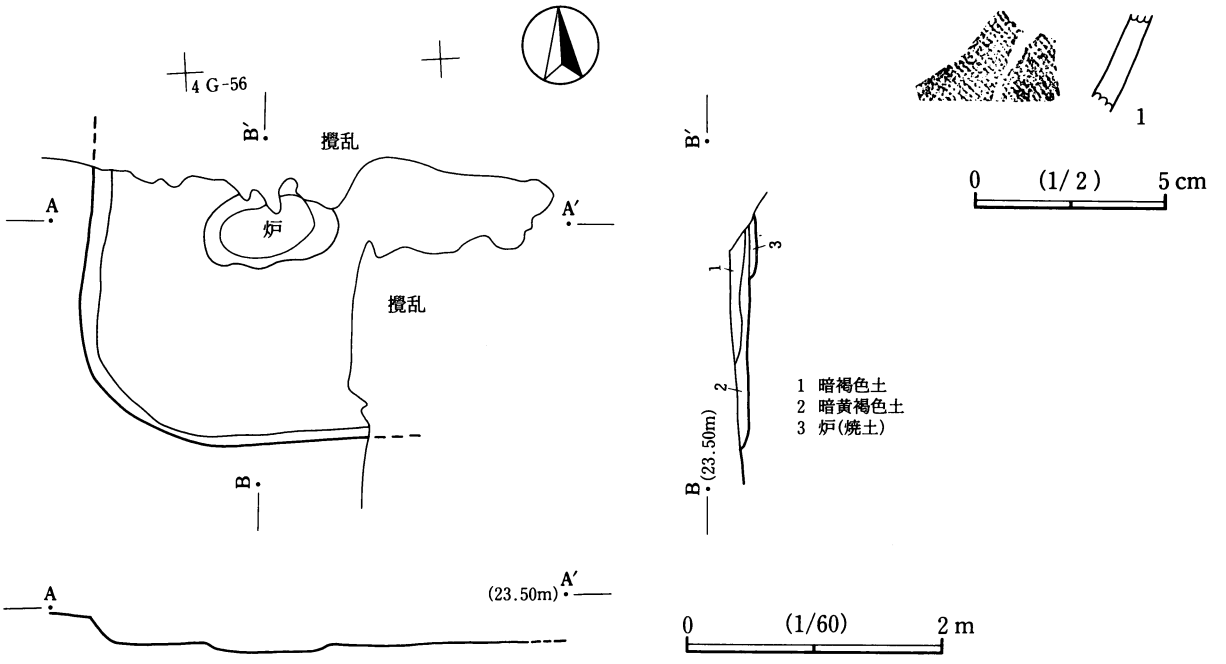
4G-56グリッド付近に位置する弥生時代後期の竪穴住居跡である。

住居跡周辺は攪乱が著しく、南西のコーナーと炉付近が検出されたのみで、はっきりした規模は不明である。確認面か

ら床面までの深さは0.05m～0.2mである。床面は全体に平坦であるが、特に堅緻な部分は認められなかった。壁は緩やかに立ち上がる。周溝や主柱穴は現存部分では検出されなかった。炉は1.0m×0.6mの楕円形を呈し、深さは0.07mである。炉底面には0.03mほど焼土層が形成される。

出土遺物は土器の細片が若干出土したのみで、図示し得るのは１点である。

１は胴部破片でＬＲの単節縄文が施される。



第15図　002号跡実測図・出土遺物

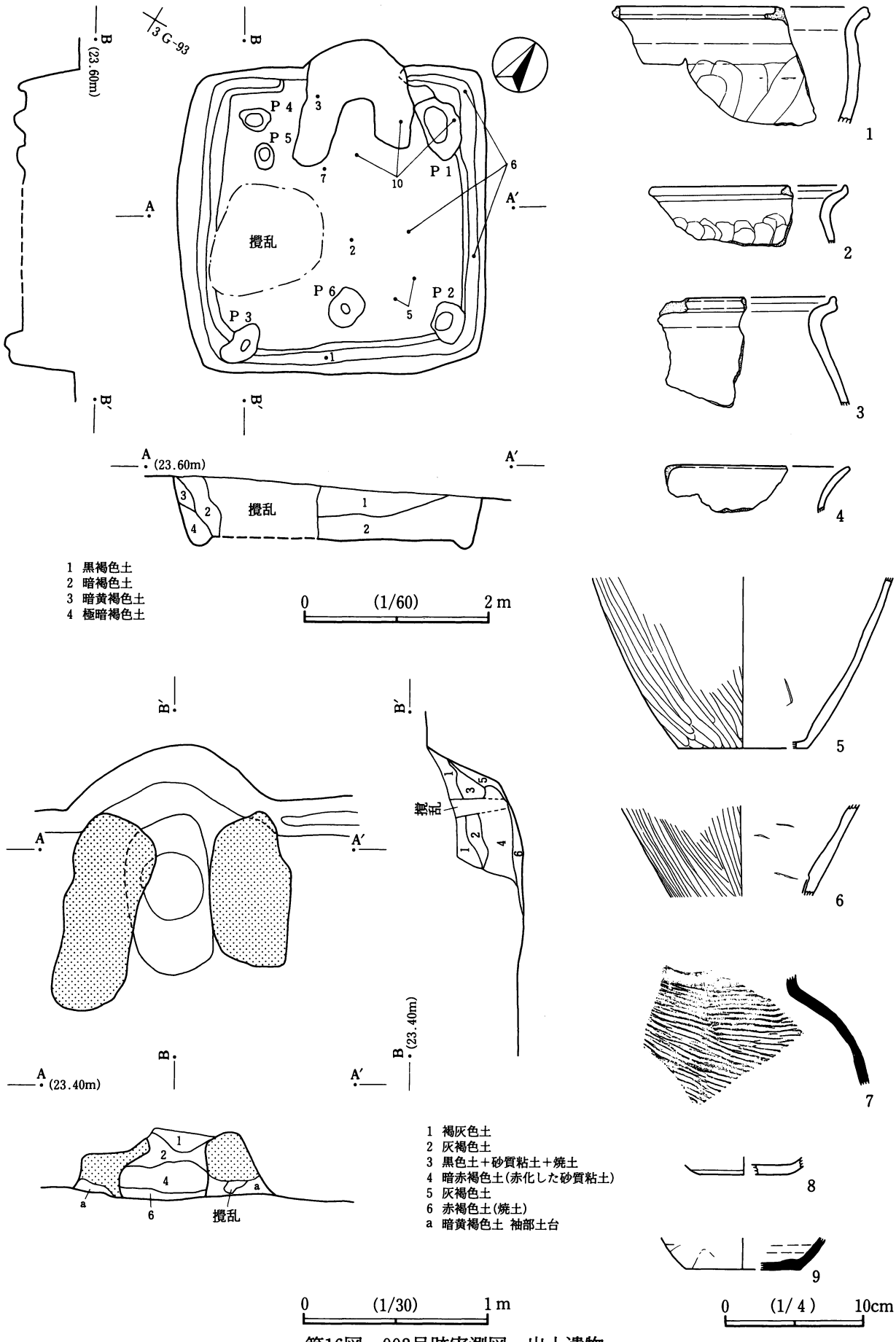
003号跡（010号跡）（第16図、図版４・６）

３Ｇ-94グリッド付近に位置する奈良・平安時代の竪穴住居跡である。

平面形は、一辺約3.3mの方形を呈する。検出面からの深さは0.5m～0.6mである。カマドは北西壁の中央に位置する。カマドを中心とした主軸方位は、Ｎ－30°－Ｗである。壁は外側にやや開きぎみに立ち上がる。周溝はカマド部分を除き全周する。周溝の深さは約0.1mである。ピットは６本検出された。主柱穴はＰ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４で、Ｐ５はＰ４と関連するものと考えられる。Ｐ６はカマドの対面にあり入口施設の梯子ピットと考えられる。床面からの深さは、Ｐ１が0.2m、Ｐ２が0.15m、Ｐ３が0.25m、Ｐ４が0.15m、Ｐ５が0.08m、Ｐ６が0.21mを測る。

カマドは両袖の基部から煙道部にかけては遺存状態が良好であるが、焚き口部は構築材が崩れている。煙道部は壁を約0.3m掘り込んでおり、煙道はやや急に立ち上がる。火床部は0.04mの厚さで焼土層が形成される。

出土遺物は覆土中やカマド内から少量出土した。１は周溝内とカマド内から出土した土器片が接合したものである。２は住居中央の床面より、３はカマドの左袖上面より、４・７・８は覆土中より出土した。５は覆土中から出土した土器片が接合したものである。そのほかに５と同一個体と思われる10（胴部破片－図版６－10）が覆土中より出土している。６は周溝内と覆土中から出土した土器片が接合したものである。３と６は胎土に雲母や多量の白色粒（長石・石英類）を含み、焼成、色調も類似していることから同一個体と思われる。



第16図　003号跡実測図・出土遺物

1～6は土師器甕である。1～3は口縁部が「く」字に屈曲し、口唇部をつまみ上げている。胴部の調整は、1・2は胴部に縦位のヘラケズリ、3はヘラナデが施される。4は口縁部が薄手の素縁で緩やかに「く」字に屈曲する。5・6は胴部下半にヘラミガキが施される。5は1/5周、6は1/6周遺存する。

7は須恵器甕である。胴部外面に横位のタタキ目が明瞭に残る。胎土に雲母・白色粒（長石・石英類）を多量に含んでいる。

8は土師器坏の底部である。体部下位、底部に回転ヘラケズリが施される。

9は須恵器杯である。体部下位は手持ちヘラケズリ、底部はヘラケズリが施される。体部下位から底部にかけて1/4遺存する。色調は灰色を呈する。

004号跡（009号跡）（第17図、図版5）

4G-89グリッド付近に位置する土坑である。005号跡に隣接する。

平面形は方形に近い楕円形を呈し、長軸2.7m、短軸2.1m、確認面からの深さ2.2mを測る。底面は立川ローム最下層のX層下部にまで達している。長軸方向は、N－30°－Wである。底面は不整な長方形を呈し、両端がやや窪んでいる。壁は底面から急角度で立ち上がり、中位の段から上はやや広がる。覆土は、最上層に暗褐色土や黒褐色土が堆積するが、上層から下層にかけてローム粒やロームブロックとなる。

遺物は出土しなかった。

005号跡（013号跡）（第17図、図版5）

4H-70グリッド付近に位置する土坑である。攪乱が著しく西側のコーナーのみ検出した。掘り込み方や覆土から隣接している004号跡と同じような形態を呈するものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

006号跡（014号跡）（第18図、図版5）

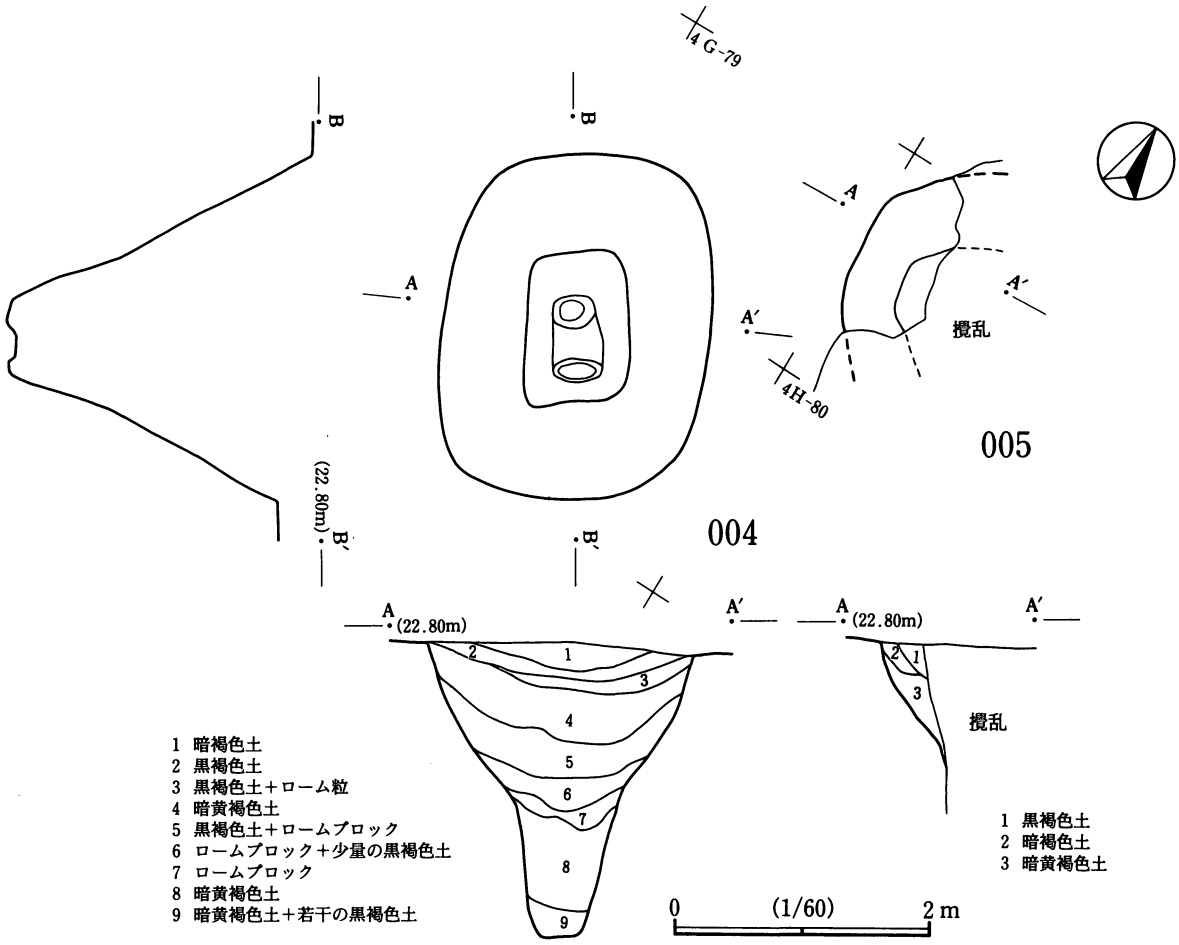
4Gグリッド内に小ピットが11基検出され、このピット群を006号跡とした。ピットの径は0.3m前後で、確認面からの深さは0.15m～0.35mである。覆土は暗褐色土(ロームブロック混入)が主体で、P1・P2・P4・P5・P9・P11の底面にアタリと見られる硬化面が検出された。このピット群の周辺は攪乱が及んでおり、攪乱内にもピットが存在していた可能性がある。また、調査区外にもピットが存在していた可能性もある。これらのピットのうち1間×2間以上の掘立柱建物跡の存在が考えられる。

遺物は出土しなかった。

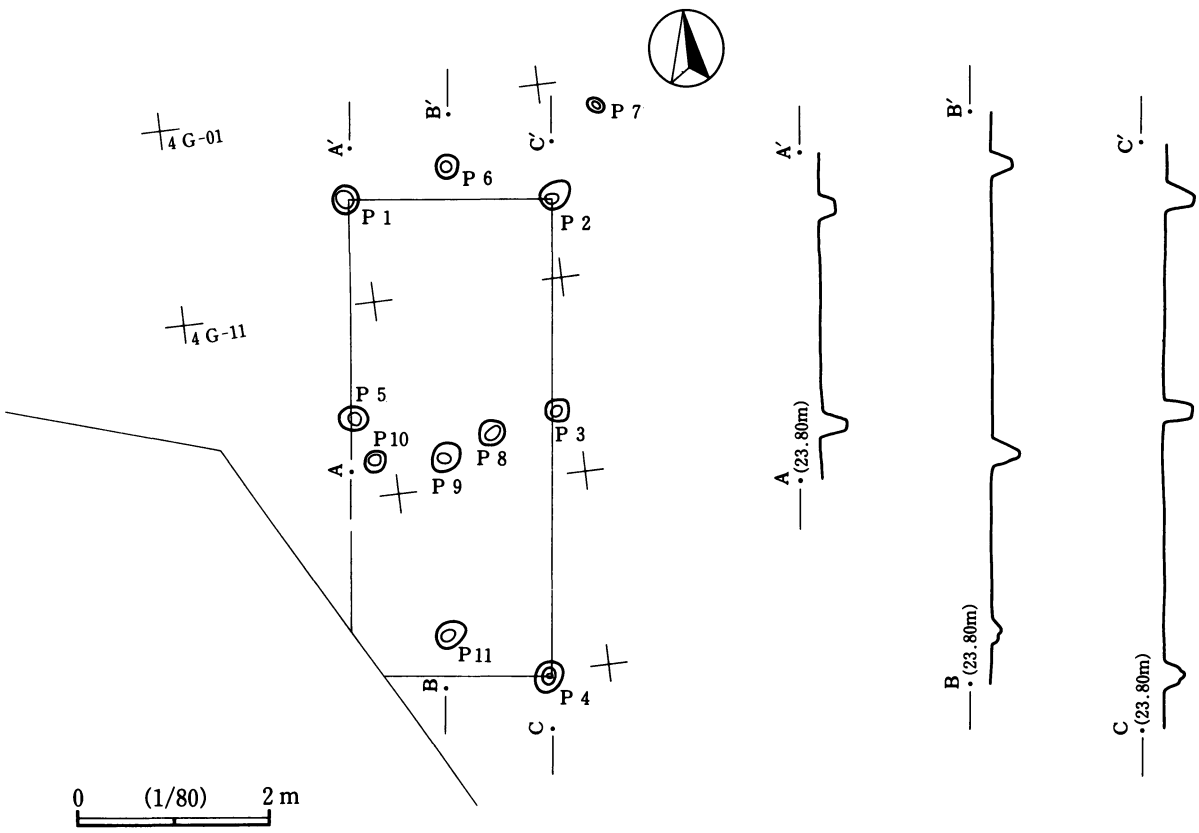
007号跡（001号跡）（第19図、図版5・6）

調査区の北西端、6B-99グリッド付近で検出された溝状遺構である。溝は南東から北西に延び、両端は調査区外へ続いている 幅約2.4m、確認面からの深さ0.9mを測る。底面は幅0.7mほどで比較的平坦である。底面から0.15mほど上に段があり、それから上は逆「ハ」状に広がる。覆土は暗褐色土から暗黄褐色土で、比較的よく締まっている。

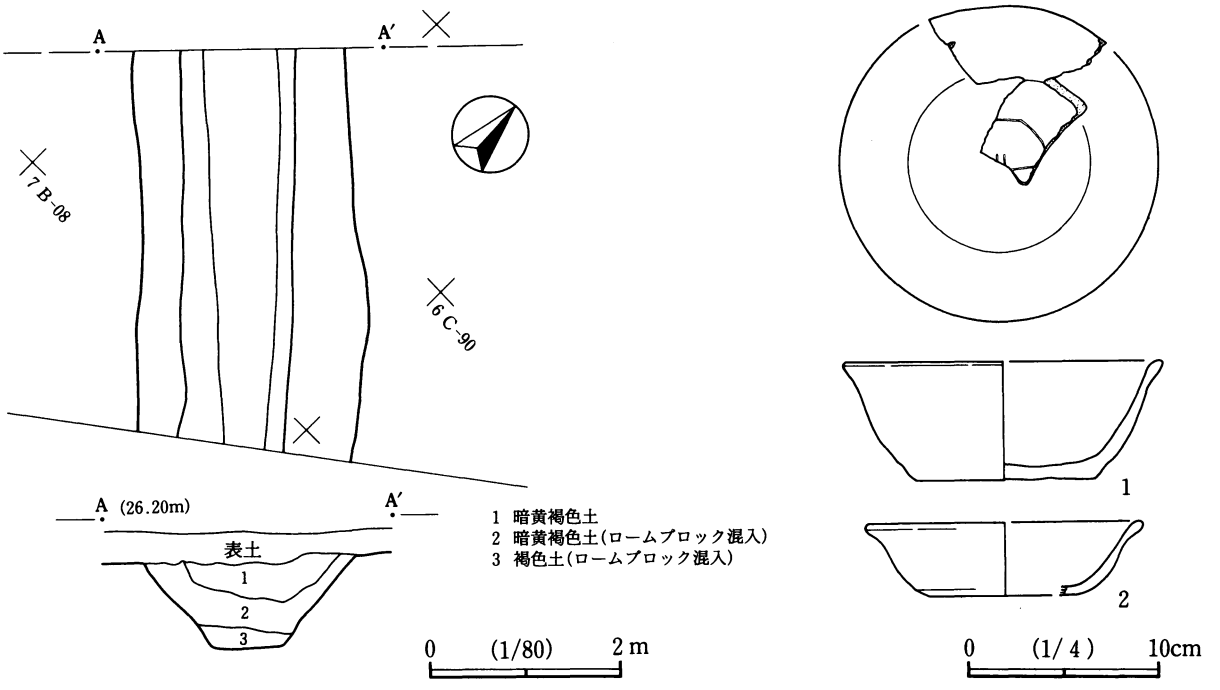
遺物は、溝に伴うものでなく、流れ込みによるものと思われる土師器・須恵器が覆土中から若干出土している。



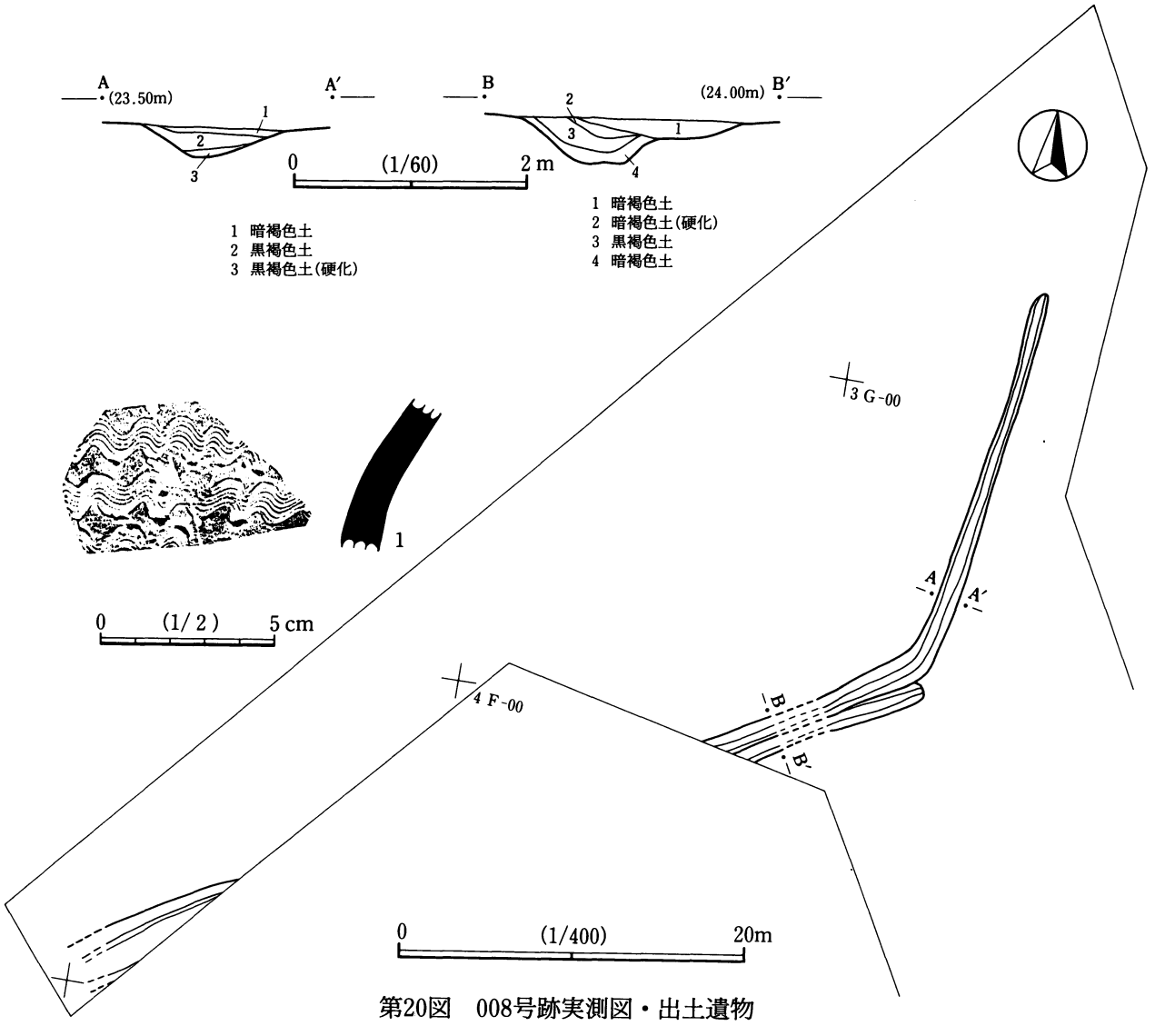
第17図　004号跡・005号跡実測図



第18図　006号跡実測図



第19図　007号跡実測図・出土遺物



第20図　008号跡実測図・出土遺物

1・2は土師器坏である。1は口縁部から底部にかけて1/5遺存する。底部内面に焼成後の線刻による記号が見られる。底部の切り離しは回転糸切りである。2は口縁部から体部にかけて1/5遺存する。体部下位に回転ヘラケズリが施される。

008号跡（007号跡・008号跡）（第20図、図版3・6）

5E-00グリッド付近から北東に向かい3G-83グリッド付近で北に折れて延びる溝状遺構である。2G-75グリッド付近で地山への掘り込みが浅くなるため確認できなくなる。北東方向に連なる部分では新旧の溝が確認できる。新旧の重複している部分では旧の溝の方が深い。溝の幅は場所により異なるが約1.0m、深さ0.2m～0.4mを測る。覆土は暗褐色土が主で、底面の一部に硬化面が認められる。溝が埋没する過程で道として機能していたものと考えられる。

遺物は溝に伴うものでなく、流れ込みと思われる土師器・須恵器が若干出土している。

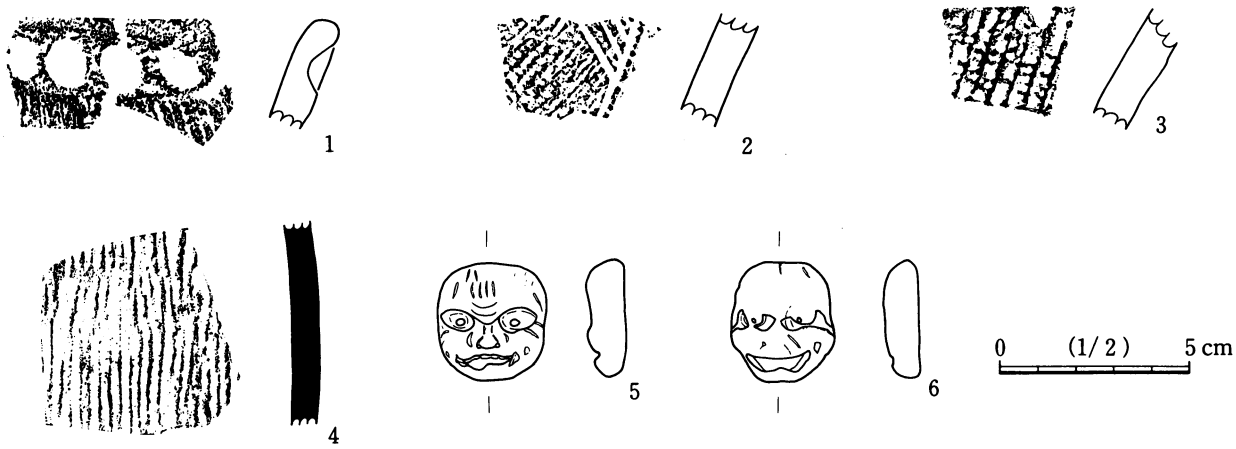
1は須恵器の甕で、櫛描き波状文が施される。

グリッド等出土遺物（第21図、図版6）

1～3は縄文時代の土器である。1・2は後期の堀之内式土器である。1は口唇部に円形押圧文が巡り、条線が施される。2は縄文の地文に沈線が施される。3は縄文が施される。1は2Dグリッド、2は表土中、3は5Dグリッドからの出土である。

4は須恵器の胴部破片でタタキ目が施される。色調は灰色で、胎土が緻密で、焼成も本遺跡から出土した他の須恵器と異なり堅く締まっている。表土中からの出土である。

5・6は近世の土製品の泥面子で、いずれも人面を型抜きしたものである。6は表面が摩耗しているため一部不明瞭である。現存重量5は9.0g、6は7.6gを測る。5・6とも5Dグリッドからの出土である。



第21図　グリッド等出土遺物

Ⅳ まとめ

1　旧石器時代

雷南遺跡で検出されたブロックは、立川ロームのⅢ層上部に出土層位のある文化層に属するものと捉えた。

ブロックは、調査区外にも続いていると思われる。このため石器組成を考える上では、資料に欠如が認められる。黒曜石製の槍先形尖頭器や彫刻刀形石器、頁岩製の細石刃が石器組成中に見受けられた。しかし、石核や石器素材となりうる形状、大きさの剝片等は見られず、剝片剝離技術を窺い知ることのできる資料は見られなかった。黒曜石製の尖頭器の調整剝片が多数出土したことは、ブロック内で尖頭器の製作を行っていたことが窺える。また、頁岩製の彫刻刀形石器は確認されていないが、削片からしてかなり大型の彫刻刀形石器の製作が行われたと仮定される。

2　縄文時代以降

雷遺跡からは、溝１条が検出された。雷南遺跡からは、竪穴住居跡２軒、陥穴１基、土坑２基、溝２条、ピット群１基が検出された。遺物は、縄文土器（後期）、弥生土器（後期）、土師器、須恵器、近世陶磁器・土製品である。

縄文時代については、後期（堀之内式）の土器が若干であるが出土した。埋蔵文化財分布地図[1)]によると雷遺跡・雷南遺跡は中期（阿玉台式・加曽利Ｅ式）の遺跡とされているので、新知見の資料となる。

雷遺跡で出土した弥生土器と、雷南遺跡の002号跡から出土した弥生土器は、共に後期のものであるが、一方は附加条縄文で他方は単節縄文と施文具の撚りの違いが認められる。

奈良・平安時代の竪穴住居跡（雷南遺跡003号跡）は、８世紀後半に比定されると考えられる。出土した須恵器甕は、胴部に横位の強いタタキ目が施され、胎土に雲母・白色粒が含まれることから常陸産と思われる。

雷遺跡で検出した溝は、明治時代の迅速測図と照合してみると、縮尺や精度の違いがあり一概には言えないが、その当時の畑の地割とこの溝の方向がほぼ整合している。また、雷南遺跡で検出した008号跡の溝も畑の地割とほぼ整合している。

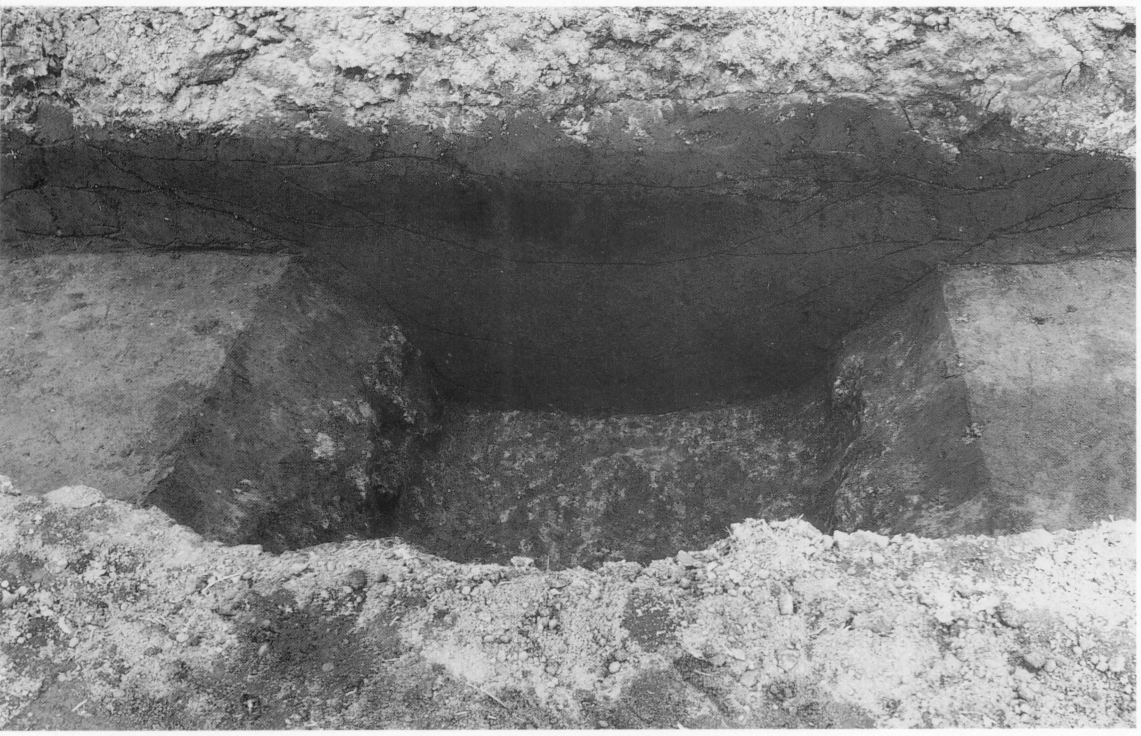
雷遺跡・雷南遺跡は「1.はじめに」でも述べたとおり、四方から侵入してくる支谷が終息する最奥部の台地縁辺部から台地中央部にかけて立地している。しかも、雷遺跡・雷南遺跡は連続した台地上である。さらに連続した台地上には遺跡が密集して存在し、複数の時代の遺構、遺物が発見されている。特に今回の調査で検出された縄文時代以降の遺構・遺物の性格等については、隣接する上谷遺跡・役山東遺跡・栗谷遺跡（八千代市遺跡調査会により平成４年度から調査）で検出された遺構・遺物と合わせて考えていく必要がある。

注１　千葉県教育委員会　1997　『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)－東葛飾・印旛地区（改訂版）－』

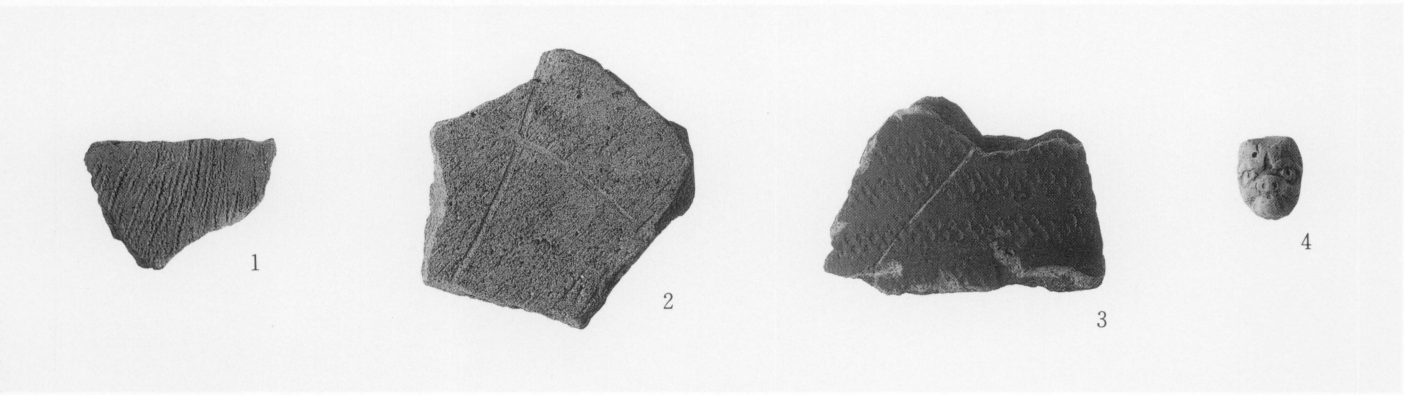
写　真　図　版

遺跡周辺航空写真

雷遺跡
調査前近景（南より）



001号跡



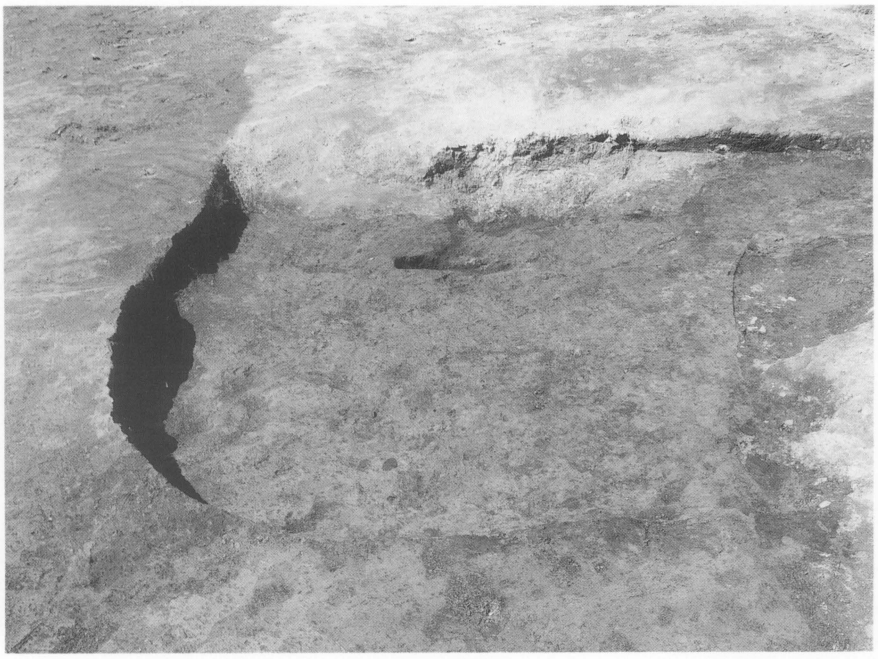
出土遺物

雷南遺跡
調査前近景（北東より）

旧石器時代
石器出土状況

調査状況

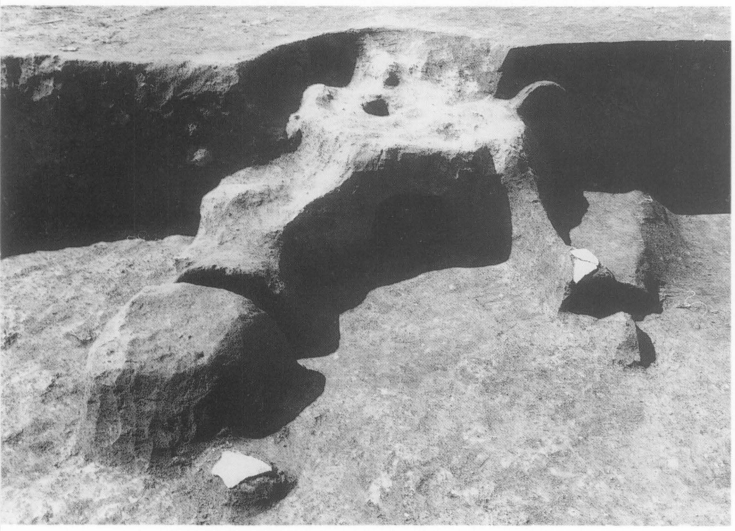
図版 4

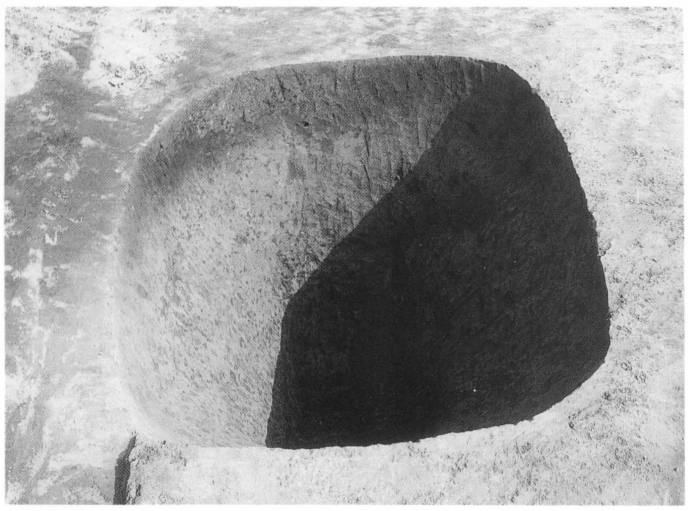


001号跡；上段左
002号跡；上段右

003号跡；中段

003号跡カマド；下段左
003号跡調査風景；下段右



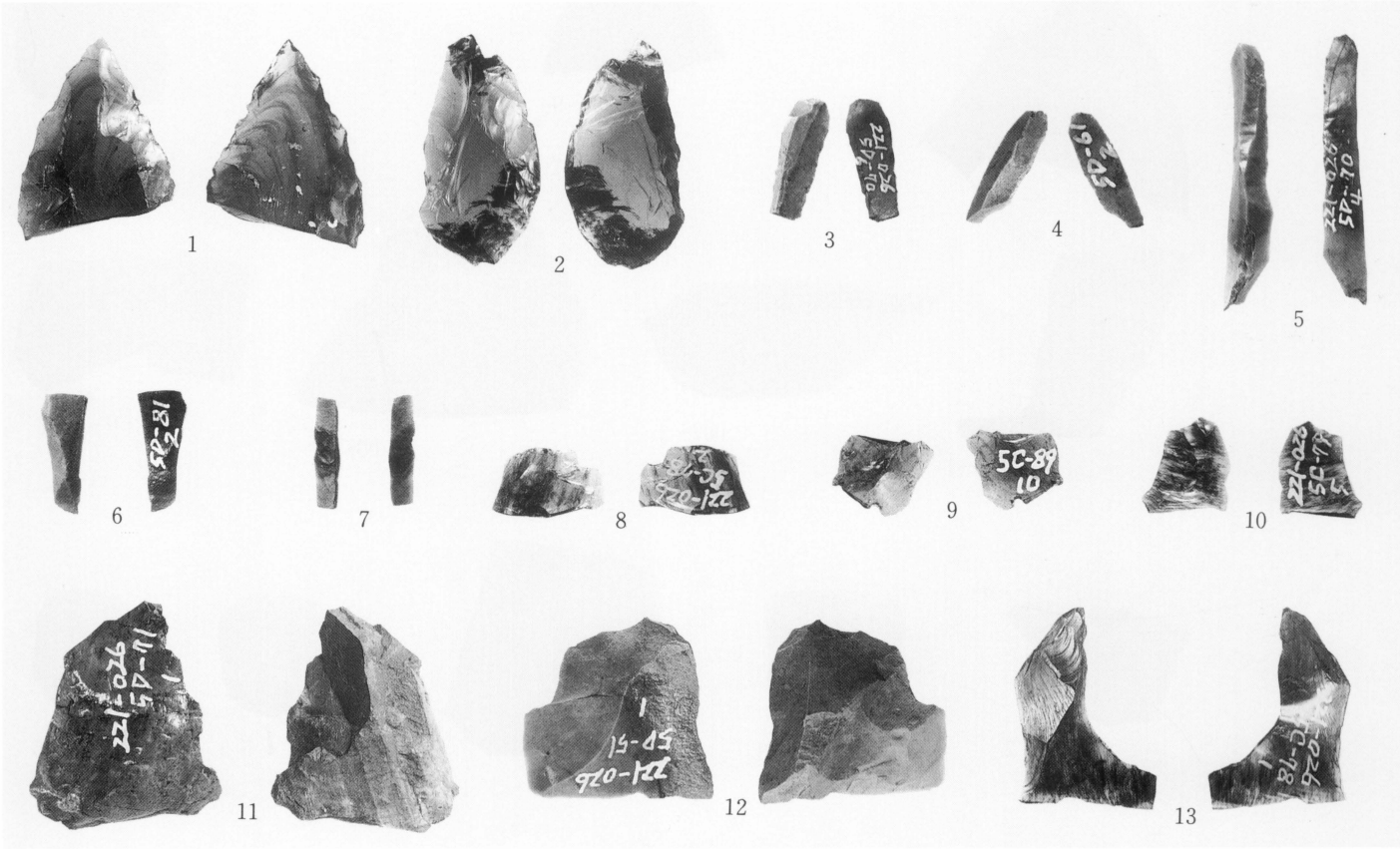


004号跡

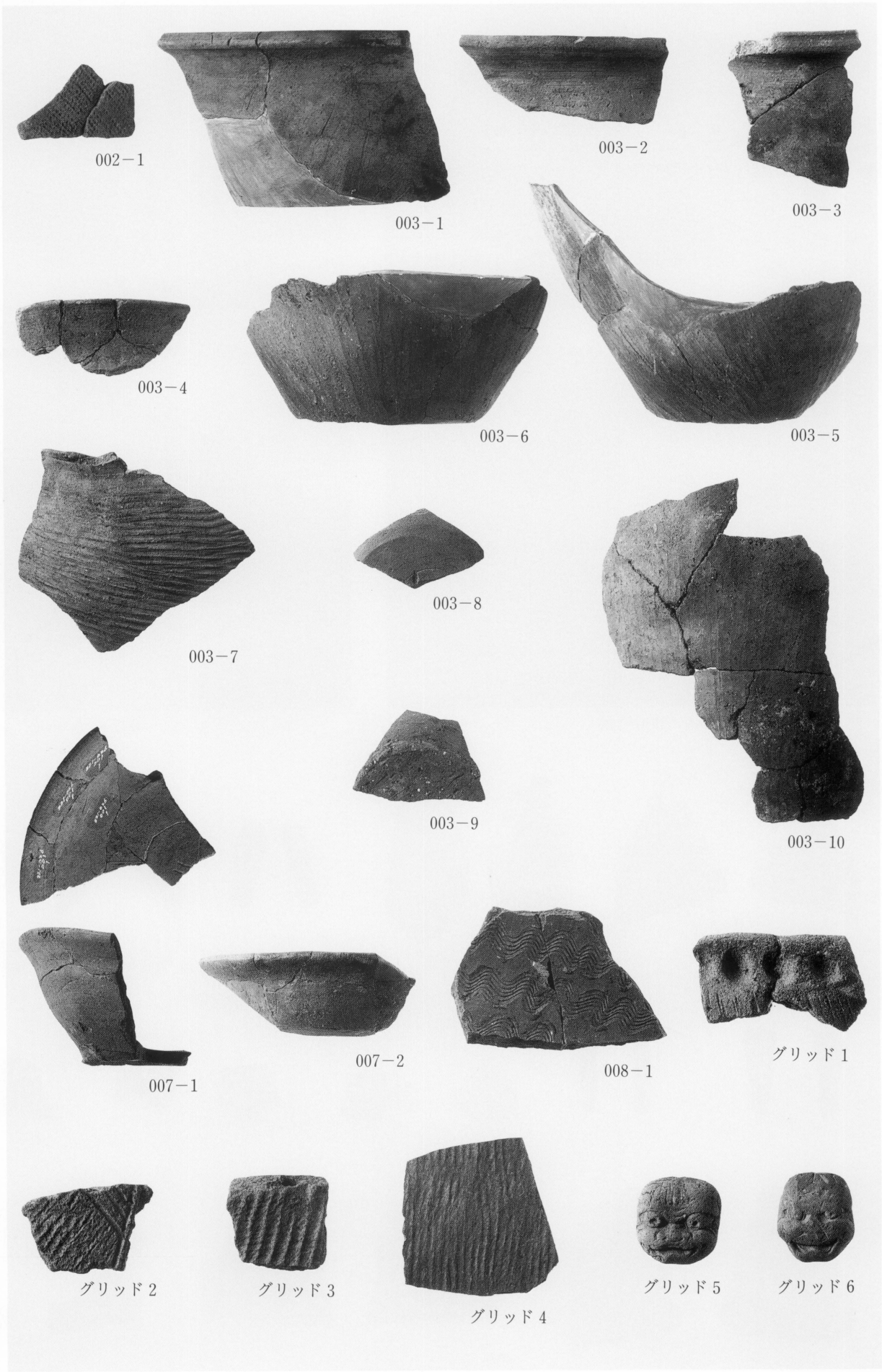
005号跡

006号跡

007号跡



旧石器時代石器


002－1
003－1
003－2
003－3
003－4
003－6
003－5
003－7
003－8
003－9
003－10
007－1
007－2
008－1
グリッド 1
グリッド 2
グリッド 3
グリッド 4
グリッド 5
グリッド 6

出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	しゅようちほうどうちばりゅうがさきせんまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	主要地方道千葉竜ケ崎線埋蔵文化財調査報告書
副書名	八千代市雷遺跡・雷南遺跡
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第359集
編著者名	榊原弘二
調査機関	財団法人千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地2　TEL043-422-8811
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
雷遺跡	千葉県八千代市 米本字下宿東 2431-2番地ほか	12221	025	35° 45′ 08″	140° 07′ 34″	19974003～ 19974018 19971001～ 19971017	5,563m²	道路建設
雷南遺跡	千葉県八千代市 米本字下宿東 2538-4番地ほか	12221	026	35° 45′ 02″	140° 07′ 36″	19974011～ 19977028	6,326m²	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
雷遺跡	散布地	弥生 奈良・平安 中・近世	溝状遺構　1条	後期土器 土師器、須恵器 陶磁器、土製品	
雷南遺跡	散布地	旧石器	石器集中　1地点	槍先形尖頭器、彫刻刀形石器、細石刃、削片、調整剝片、砕片	
	集落跡	縄文 弥生 奈良・平安 中・近世	陥穴　1基 住居跡　1軒 住居跡　1軒 土坑2基、ピット群1群、溝状遺構2条	後期土器、 後期土器 土師器、須恵器 土製品	

千葉県文化財センター調査報告第359集

主要地方道千葉竜ケ崎線埋蔵文化財調査報告書

八千代市雷遺跡・雷南遺跡

平成11年3月31日発行

編　集　財団法人　千葉県文化財センター

発　行　千　葉　県　土　木　部

千葉市中央区市場町1-1

財団法人　千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印　刷　株式会社　エ　リ　ー　ト　印　刷

千葉市中央区市場町6-8